

# 地域と農業

会報

第4号

Jan. 1992

*Winter*

特集 女性から見た農業

社団法人 北海道地域農業研究所

暮らしお夢  
ひろげます。



農協の窓口は、どなたでもご利用いただけます。

自由金利型定期貯金(M型)

### スーパー定期

300万円からの高利回り運用に！

暮らしにエンジョイ

### マイカーローン TRY

融資額■500万円まで。融資期間■7年以内

自由金利型定期貯金

### 大口定期

1,000万円からのより有利な高利回り運用に！

「イザ」というときのパートナー

### カードローン エル

ご利用極度額■10万円～300万円まで

●お申し込みお問い合わせは  
全道の農協金融窓口へどうぞ



農

協

北海道信連

# 地域と農業



表紙  
撮影地=秩父別  
撮影者=谷口雅之

## 一目 次一

### 特 集

- 2 座談会 女性から見た農業  
—女性がつくる新しい農村と農業—
- 12 座談会を終えて
- 解 説
- 15 牛乳流通の広域化と酪農構造問題  
宮城教育大学 助教授 小金澤孝昭
- 21 BOOK REVIEW  
北星学園大学 助教授 杉岡 直人
- 解 説
- 22 農協の企画・開発部門の機能  
(社)北海道地域農業研究所 常務理事 富田 義昭
- エッセイ
- 26 「美味さ」と在来品種、「地方品種」  
野菜と文化のフォーラム主宰 江澤 正平
- ときの話題
- 28 お湯と一緒に赤ん坊を流すな 一農業基本法の大切な精神一  
札幌大学 教授 岩崎 徹
- 連 載
- 30 情報システムはいま ③  
(社)北海道地域農業研究所 専任研究員 中村 正士
- 37 研究日誌
- 38 掲示版
- 40 DATA FILE・読者から

# 見た農業



座談会風景  
その1

## 女性がつくる 新しい農村と農業

男女雇用均等法が施行され、企業の職場における女性の進出や、それに伴う女性の新たなストレスなどについての記事が新聞を賑わせている。

家族労働による農業においては、従来から女性の役割が強調してきた。しかし、農業経営や村づくりに女性の意見は十分反映されているのだろうか。そして、女性は今の農業や農村の生活をどう見ているのだろうか。

この特集では、女性から見た農業・農村の現状と女性のえがく新しい農村と農業について、農村からお二人、都市側から三人の女性をお招きし話し合っていただいた。

(編集部)

### 酪農は天職、毎日の仕事が

#### 楽しくてなりません

—まず、討論の前に簡単な自己紹介から入りたいと思います。それでは野幌の農協婦人部の栗井さんからお願いします。

栗井 野幌で畑作を営んでいる栗井です。現在は麦が主体で面積は一四haほど。家族は主人と子供一人の四人暮らしです。私はもともと埼玉県の出身で、保育専門学校

を卒業したのですが、そのままぐに就職するのが嫌で、江別の町村農場で酪農実習に参加しました。そこで主人と知り合って結婚し、農業を生業とするようになつたんです。最初は野菜專業でしたが、思うような経営ができなかつたので、畑作に切替えました。野幌は地理的に札幌に近いせいか、女性

# 女性から

## 座談会

出席者

江別市 農業・主婦

粟井 文子

猿払村 酪農・主婦

円丁 康子

北星短大生活経済研究室  
研究員

赤城 由紀

市民生協コープさっぽろ  
副会長

田端 弘子

(株)道新オントナ編集部  
松井 歩

司会 幸 健一郎  
(地域農研 研究部長)

編集協力・写真提供＝  
(株)ワークボックス

座談会風景  
その2



の意識も進んでいて婦人部活動も活発なほうだと思います。

——粟井さんは農協のフレッシュミセスというコンクールで、北海道の優秀賞を取られた経験があります。次に猿払で酪農をなさっている円丁さん、お願いします。

円丁 私は四国の愛媛出身なので

すが、緑の草地で牛とのんびり暮らせたら……、という夢を抱いて、

帯広畜産大学に入りました。そこ

で同じように酪農を希望している

主人と一緒に酪農を希望している

二十四歳のときに農業開発公社の

斡旋で猿払村に入植が決まつたん

です。牛は七十頭、草地は山も入

れば六〇haほどです。家族は主

人とふたりの子供、今の仕事は天

職だと思っていますし、毎日が楽

しくなりません。

——それでは都会の三人の方、農業との関わりを含めて自己紹介をお願いします。

田端 生活協同組合コープさっぽろの非常勤の理事を務めている田端です。私は帯広の出身で、北大を卒業した後、高校の講師をしておりましたが、出産を機会に育児

に専念。子供たちの手が離れる頃、

ちょうど市民生協が組合の代表を募集していて、そのとき以来二十六年間、コープさっぽろの活動を続けてきました。私たちの組合員は七十万人ほど、その九九%が主婦ですから市民運動というより婦人運動だという感を強く持っています。

——生協の活動は「食」の問題に強い関心を持たれているようですね。

田端 はい。特に農産物の自由化問題がきっかけとなって、農業は生産者だけの問題と遠ざけて考えられなくなりました。組合員の方の考え方方は「食物は近くで作って近くで消費するのが一番だ」ということです。遠距離を輸送する農薬や添加物が必要になりますから。また日本のような農法は環境の保全に役立つということで、その観点からも食料は自給すべきだと考えます。

赤城 私は北星短大で、生活経済研究員をしています。以前は広告代理店のコピーライターとして、市町村関係の広報誌やパンフレットを作成していたので、道内の農

村部に取材する機会が多くありました。その仕事を辞めて研究室に入つたのが四年前。食をとりまく多くの問題について、真剣に考へ、学生なり企業の方たちにどう伝えいくか、その架け橋をしていきたいと思っています。また、私は静内の山奥で五歳まで育ちましたので、原体験として、取れたての物を食べた美味しさ、馬や牛と暮らし楽しさは忘れることができません。

松井 道新が女性のために発行しているフリーペーパー、「オントナ」

したい。その仕事を辞めて研究室に入つたのが四年前。食をとりまく多くの問題について、真剣に考へ、学生なり企業の方たちにどう伝えいくか、その架け橋をしていきたいと思っています。また、私は静内の山奥で五歳まで育ちましたので、原体験として、取れたての物を食べた美味しさ、馬や牛と暮らし樂しさは忘れることができません。

松井 道新が女性のために発行しているフリーペーパー、「オントナ」

## 農業の経営について、夫婦で話し合う機会をもつと多く…

——皆さん、それぞれの形で農業とかかわりをもつてらっしゃるようですね。それではまず農村の女性の地位や役割について話合つていきたいと思います。地位や意識がどう変化しているか、現状を話していただけますか？

栗井 地域によって差があるようですが、江別の農家の若い女性を見ていると、畠仕事を嫌う方が増

えています。全く子育てに専念して、農繁期に夫が夜遅くまで働いていても、手伝おうとしません。また、お姑さんもそれを黙認しています。花嫁不足の農村に来てくれたのだから、大切に扱わなくていい。花嫁不足の農村に来てくれたのだから、大切に扱わなくていい。花嫁不足の農村に来てくれたのだから、大切に扱わなくていい。

栗井 はい。野幌農協の婦人部は私と同年配の方が多く、考え方も似ているので楽しくやっています。忙しい仕事の合間に、女性だけで話しを聞きますとお姑さんの意識が封建的で、婦人部活動のために集まって、お酒やお菓子を持ち寄

の編集をしている松井です。私は札幌生まれの札幌育ち。大学を卒業したあと、新聞社に勤め、家庭欄を担当したときに、食の問題と深く関わりを持ちました。ちょうど有機農法や無農薬野菜が話題になっていた頃で、農家に取材に行って農作物がどのように作られ、どんな流通経路をたどって私たちのもとに届くのかを勉強しました。その後、東京転勤などを経験して今

の「オントナ」の編集部に入りました。

——栗井さん自身は、婦人部活動を開けても「また遊びに行くのかい？」という目で見られてしまったそうです。女は外に出るべきではないという古い体質がそのまま残っているようです。

緑の草地で牛とのんびり暮せたら





栗井さん

つていろいろ悩みを話したりしてお喋りしたりしてストレス解消しています。仕事をするうえでのはりあいにもなっていますね。

——野幌は札幌に近いので、考

方が都会的なのかもしれませんね。猿払の円丁さんはいかがですか？ 円丁 私は今年、婦人部の会長になつたのですが、集まりも悪いし、やりづらい部分はあります。皆さん、家に縛られていることに強い不満は持つているのですが、解決

しようという積極さも見受けられません。しかし、酪農という仕事の特殊性が女性を家に閉じ込めている、という面もあると思います。朝と夜の搾乳は必ず行わなければなりませんし、家を留守にできる時間は限られていますから。

結局、他の酪農家のやり方を見る機会がないので、夫に言いつけられるままに仕事をこなしていくしかないんです。考える余地を与えてられないし、夫やお姑さんと話し合うことも少ないのが現状です。

田端 都会の主婦から見ると、農村の夫婦は同じ仕事を協力しあ

つてなさっているわけですから、会話も多く、よい夫婦関係が作れているんだろうな、と映っています。しかし、一概にそうとは言えないようですね。

円丁 残念ながら少ないと思います。と、言うのは余所（よそ）に視察に行つたり、会議に出たりと情報を得る機会を与えられるのは

いつも男性で、女性は留守番しているわけですから。何回かに一回ぐらいは女性も外へ出て情報を摑む機会があればいいなと思います。しかし、いざとなると女性は決断ができます。結局は家に閉じ籠もつてしまるのが現実です。夫にまかせきりの女性が多いのではないでしょつか？

## チャンスさえ与えられれば 女性特有の判断力が生きてくる

田端 確かに、男性の分析力や判断力は女性より優れている部分はあるけれど、女性特有の判断力が必要な場合もあると思いますよ。

例えば生協の組合活動の中でこんなことがあったんです。食品の着色料について研究していたグループがワインナーを作っている工場に見学に行ったとき、工場長から「ワインナーは赤くなければ商品ではない。それを言うなり、あなたたちの口紅の色素はどうな

おっしゃいますが、それが商品かどうかは消費者が決めるのではなくでしょ？」と発言した人がいました。

そういう鋭い判断力は女性ならではのものです。チャンスさえ与えられれば女性の力が役立つ面もあるのではないかでしょ？

栗井 まず、そういう意識を育てる土壤をつくる必要があります。農村の中ではまだ女性が経営について口出しことをタブー視する空気がありますから。男性の側も、経営について女性に反論



円丁さん



牛舎での親子の会話は楽しい、子供も一家を支える労働力。

されたりすることを嫌う傾向が強いようですし……。田端 今、新規就農の方が増えているつしゃるとか。円丁さんはご夫婦とも大学を卒業して猿払に入植なさったそうですが、脱サラで農業に転職する方もいらっしゃるそうですね。そういう新しい血が、地域に大きな影響を与えるのではないか?

円丁 脱サラで入ってくる方も増えていて、確かに新しい考え方をする女性もいますが、大きな影響力を持つほどではなっていま

せん。もとからいる人たちはヨソはヨソと割り切った考え方をしますから。

栗井 私の主人は厚別出身で、野幌に来てからかれこれ十四年たちます。いまだに「よそもの」としか見られません。私たちが新しいやり方を取り入れて成功しても

「あそこは親が金持ちだから」と言われるだけで、自分で新しい方法を試みてみようという意識は生まれてこないようです。

赤城 農村の意識が立ち遅れているというお話しがでましたけれど、それは農村に限ったことではないと思います。都会でも年配の方の中には視野の狭い方が大勢いるし、若い女性を見ても「私はお茶くみだけていればいい」という受動的な人生観をもつた人も多いんです。ただ、都会の人は都會しか知らない、農家の人は農家

しか知らないという今の現状は見直していくべきではないでしょうか? テレビや新聞を通してお互いのことを知っているようで、実は知らない。私たちも今日のよう

に農家の方と実際にお会いして、お話しする機会はほとんどあります。もっと交流をして、生の情報交換していくことが必要だと感じました。

松井 農村だけが立ち遅れているのではないという赤城さんのご指摘には同感です。都会の女性の中にも自分の仕事について、深く考えていない方が多いですから。それに花嫁不足の問題について、農村の問題としてクローズアップされていますが、都会の男性も結婚相手を探すのはたいへんな時代なんです。つまり農村で言えることは札幌でも言えることなのではないでしょうか?

## 都会と農村の婦人が互いに 生の情報を交換する機会を

今までのお話しかり、農村部

の女性が有利だと思えるのは積極



赤城さん

赤城 田端

的に勉強しようと考えすれば田那さんと対等の立場で仕事をすることができるので、経営に参加することができるということですね。しかしそのためには、さまざまな問題が残されているのも事実でこのあたりを解決していくば、農村も女性にとって魅力のある働き場所となりそうですね。

円丁 そのとおりですよ。広い土地に囲まれていますから、都会では不可能なことが田舎では簡単にできる。たとえば、子供たちにブランコをつくりあげたり、畑をつくったりと、楽しみはいくらでも見つかります。にもかかわらず、都会を羨んで、自らの人生を楽しむという意識を持たない女性が多いようです。

田端 先程、赤城さんがおっしゃっていたように、都会と農村の女性がコミュニケーションして、お互いに話し合ってみたらどうかしら? 都会生活はここが魅力だけど、こんな不便があるとか、農家の暮らしはこんなところが楽しいとか……。

赤城さん

女性にとって魅力のある働き場所となりそうですね。

円丁 そのとおりですよ。広い土地に囲まれていますから、都会では不可能なことが田舎では簡単にできる。たとえば、子供たちにブランコをつくりあげたり、畑をつくったりと、楽しみはいくらでも見つかります。にもかかわらず、都会を羨んで、自らの人生を楽しむという意識を持たない女性が多いようです。

田端 都会は子供たちの遊び場所が少ないし自然とふれあう機会も少ないのでしょう? そこでコーラスっぽろでは「ふれあいの森」という宿泊施設を積丹町につくることになつたんです。家族ぐるみで自然と親しめる場所になると思いまして、積丹の農協の方と産直の話もまとまり、都会の家族と農家の方との交流ができるものと期待しています。

都市と農村の交流

## 農業を通じて得られる教育効果 それは生き方の根本を教えてくれる

——次に、農村の教育問題に話題を変えたいと思います。都会では受験戦争の弊害が云々(うんぬん)されていますが、農村でも進学問題は悩みの種となつてているようでね。

赤城 私は農村の子供たちは恵まれた自然の中で伸び伸びと育つているものと思っていたのですが、最近は都会の塾に通う農村の子供が増えているとか。そういうえば、夜の十一時頃、JRに乗ると塾帰





田端さん

りと思われる小中学生の集団を見かけます。親はきっと、この情報社会、国際化社会のなかで子供が取り残されてしまうのではないという危機感から都会の塾に通わせるのでしょうか。

——都会の情報が悪い方に働いてしまっているわけですね。

赤城　ええ。そうなると農村の子供たちは都会志向になつて、自然の中にいながらテレビゲームで遊ぶようになつてしまつ。人間が家畜化されて、種としての弱さがどんどん広がっていくような危機感を感じてしまいます。

栗井　たしかに農村では不安感から、子供を塾に通わせているケースが多いですね。また別の問題もあります。私の子供が通つている小学校は全校児童が三十人に満たないような小規模校で、そんな中で六年間過ごした後、いきなり人数の多い中学校に入ると、うまく対応できなくて悪い方に染まってしまう子供も多くいるようです。

赤城　伸び伸び育つた農村の子供たちが、急に競争社会の中に放りこまれて、劣等感を持つてしまう

のは可愛ですね。知識詰め込み型の教育をされてきた子供より、農村の子供のほうが底力は強いと私は思いますが、純粋なだけに悪い方に響くと怖いと思います。

栗井　話はちょっとずれますが、最近農村では、子供に農作業を手伝わせるのを嫌う傾向があるんですね。私は農家の子供が仕事を手伝うのは当たり前のことだと想いますが、まわりが許してくれません。

「小さな子供を使って可愛そうに。手がたりないんだったら、誰かに頼めばいいでしょう」と言われてしまします。昔は、そんなことがかつたんですけど……。

円丁　子供に農家の仕事を手伝わせるのは、けつして悪いことではないはずです。私も家の中では子供たちに「勉強しなさい」と小言ばかり言つていますが、牛舎での親子の会話はもつと夢があつて楽しいものになります。また子供も、一家を支える労働力として家計を支えるということは素晴らしいことなのではないでしょうか?

栗井　ええ。子供に手伝いをさせないと、「親が子供を養うのは当

たり前」という意識しか持たないようになつてしましますよ。

田端　残念なお話しですね。農業の中で育まれる教育、というのは受験勉強では学ぶことのできないものがあります。人間としてどう生きるか、という根っこの部分を教えてくれるものなのではないでしょうか? それなのにそれを切り離して、都会の子供のように学習塾と参考書とテレビゲームに囲まれた生活をするなんて……。ある人から聞いたはなしですが、都会の子供たちは受験の技術がうまく、受験受験で頭が一杯になつてしまつて、農村出身の子供は一年位浪人しても大学に入つてくると頭にいろいろなものを詰め込まれていないので、どんどん伸びていくといつていました。

こんなところに農村の親さんは自信を持って、子供の教育を考えて欲しいのですね。

松井　農作業を子供にさせない親が増えているということですが、それは都会でも同じではないでしょうか? 商売をしている友人に話を聞いても、子供には手伝わせ

ないという人が増えています。私が問題だと思うのは、自分の子供に農家を継がせたくないという方の多いこと。理由は「苦労するのを見ているから」とおつしる方がほとんどです。時代の

うきめにさらされ、自分たちの力はどうしようもない苦しさの中にある農家の方たち。私たちはその部分を考えいかなければと思います。

## 生産者の側から消費者へ メッセージを発信してほしい

——今農業が抱える大きな問題として、農村の老齢化が挙げられます。例えば平成三年度、新卒で農

業に就いた者は道内で三百人しかいません。北海道は二百十二市町村ありますから、一市町村に一人五人という悲惨な状況なのです。この状態が続けば農村の老齢化はどんどん進んでいくでしょうから、もっと農村の生活の素晴らしさを見直していく必要があります。評論家の向井承子さんという方が「農村は生き方の宝石箱」と書いておられましたが、その部分をアピールしてはどうでしょうか？

田端 生き方の宝石箱、というの

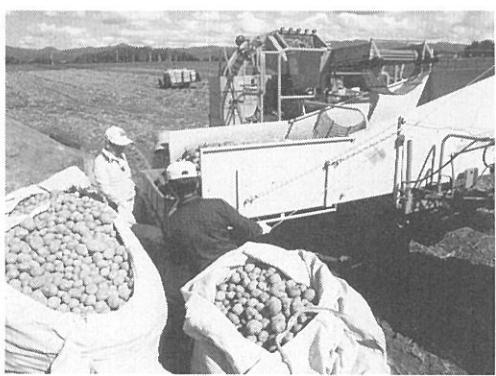
——おっしゃるとおり、国民的な合意を得て農業政策をたてていくことが、日本の農業を良くしてい

うのは、無理があると思うんですけど

日本農業の展望がはつきり見えてこない限り、自分の息子にも「おまえ、継いでくれ」とは言えないはずですからね。必要なのは、国民的な合意で支えられた、農業の将来展望ではないでしょうか？

今、ガット、ウルグアイラウンドで米を始めとする農産物の自由化が叫ばれており、農業はますます厳しい状態に立たされていますから。

くことに繋がることでしょう。  
田端 今、消費者の要望ばかりが目立っている状況だと思います。それも「安全で、おいしくて、安くて」というエコロジズムを押しつけています。しかし農村の側からの発信は、よほど耳をすまさなければ聞こえない。たとえば私たちは産直で、北見から無農薬たまねぎを共同購入していますが、箱を開けると、どんな農法で、幾代かかって土をつくって、というメッセージがかかる手紙が入っています。



馬鈴薯の収穫



松井さん

ます。生産者の方からこんな発信があれば、お互いに理解も深まると思うし、お互いの要望をぶつけ

あうきつかけになるのではないで  
しょうか。

## 規格外の農産物を捨ててしまう悲劇、味はかわらないのに……

田端 最近ですが、長崎のある農協と、コーパスつぼろの間でこんなお話しがまとまつたんですよ。わたしたちがみかんの共同購入をする際、調査団を長崎に派遣して、先方の農協の婦人と話しあつたときに、「小さなみかんは市場で値段がつかない。味は同じなので、なんとかならないものか」という相談を受けたそなんです。大きさはピンポン玉よりやや大きいくらいのものなんですが、ではサイズ〇〇型をやってみようといふことになりこれが好評を博しました。やはり遠くても、足を運びあうことがないせつだな、とそのときに感じたしだいです。

円丁 今のお話しさ農村側からすると、とてもありがたいことです。規格外の農産物を店に置いてもらら

えないのは、大きな悩みの種で、味は変わらないのに捨ててしまうこともあります。また、土がついていたり、虫が喰っているものをしてもらえないのも残念ですね。町の人はアメニティを追い過ぎて野菜の本来の形、状態がわからなくなっているのではないでしょか?

赤城 農産物が工業製品と同じように扱われた悲劇なのでしょうね。規格外品は輸送が楽で運搬料金が安くかかるということなども関係しているのかもしれません。あくまで自然を相手にして人間がつくつたものだということが、なおざりにされている感があります。

また、工業製品を真似てブランド化する動きのあることも不安を覚えます。例えば夕張メロンばかり

りが脚光を浴びて、その他の地域のメロンが影に隠れてしまいまし。消費者はブランドに誘惑されやすいので、変なブランド信仰はつづらないほうが多いのではないでしょか?

栗井 規格外品のお話しがでしたが、たしかに一箱の規格外品を作ることに、その三、四倍の作物を捨てなければならないという悲劇があります。見栄えが優先してしまうんですね。ですから消費者の方には何が美味しいのか、もっと研究してもらいたいな、と思います。赤城 今はパック売りの野菜が多いので、都会の人間は素材を選べる目をもつた人が少なくなってきています。料理教室の先生でさえ素材選びは意外と苦手なのではないでしょうか? ですから農村部のご婦人で、本当においしい物を知っている方が素材選びのスクールなりを開校してくださることを望みます。

農村の女性が、都会の女性に対して、消費者を教育するのだ、という積極性を持つことは双方にどうプラスになるかと思います。



司会 幸 健一郎

## 近くで作って近くで消費、自給できるのに他国から買うべきではない

円丁 今、歐米では農村滞在型のホームステイがブームだと聞きました。私たちもぜひ都会の皆さんに農村に来ていただきたいと思います。話したいことはいっぱいあります。町から新しい空気を運んで楽しい。そして、お互いの意見を交換しあえたら、新しいことが生まれるのではないか? 一般の主婦同士がつながりあうことなどがたいせつだと思います。

田端 私が訴えたいことは二つあります。ひとつは、見栄えのいい農産物に慣れてしまつた私たちが、自然のままの美味しいものを選ぶ感覚を身につけるには時間がかかるということ。ある日、組合員がりんごの生産者の方から、「りんごは袋をかけない方がおいしいという説明をうけたんです。ただし無袋りんごは見栄えは悪いんですね。その日、お土産として真っ赤な有

袋りんごと、無袋りんごを選んでもらつたり、全員が見栄えのいい有袋りんごを持って帰つたという笑い話がありました。一度くらい耳から情報を得たくらいでは駄目なんです。ですから生産者の方も繰り返し、繰り返し発信してほしいですね。それも女性同士が発信しあうことが大切だと思います。

——なるほど。一度や二度ではなく、根気よく情報を発信しあうのでなければ、成果も期待できないというわけですね。

田端 はい。もうひとつは穀物全体で七、八割も国際市場に門戸を開いている日本の食料自給率をもつとみんなに知つてほしい。米くらいの自由化してもいいという意見も多いようですが、米だって五万トクくらい既に入つているんです。一〇〇%自給できるものをなぜ減らさざいました。

今日はお忙しいなか、お集まりいただき、たいへん意義深いお話をきかせていただきありがとうございました。

いけないのか、みんなで勉強していかなければいけないと思います。最初に申しあげたように、食べるものは身近でつくることがお互いの仁義です。自分のところでつくれないでよそから買つてくることはすべきではない、という基本姿勢に立つべきです。

# 座談会に

順不同

栗井 文子

今回の座談会をおえて、まず思つたことは、農村であろうと都市であろうと所詮、人間としての魅力が、今は問われる時代なのだとということです。適齢期の男性の婚期が遅れているという事では、特に農村部が問題視されがちであるが、農家自身が農業に見切りをつけるとするような現実の中、今、自分自身が置かれている現実につかりと目を向けている人がどれだけいるのでしょうか。個人の力では、確かにどうにもならない事も数多くあるのはわかりますが、行動をおこす前に、もうすでに諦めてしまふような、そんな人間が増えている現状を、まずどうにかしなければ話は先に進まないとと思うのです。農村部の人も都市部の人も、もっと自分がしなければならないことに自覚め、自分が今して

いることに疑問を抱き、そのうえで自分自身の行動に、自信を持つことが必要だと思います。今が良いければ、後先のことは、どうでも良いというのでは、進歩などなくなってしまいます。

都市部、農村部互いに今は、日本農業を守るために、力を合わせる時期なのです。今の状態が長く続くようでは、日本の国の中から、農業は消滅してしまうでしょうか。女性でなければ、判らないこと、女性ならではの発想で、この大事な時期を乗り越えるのが一番だと思います。古い因襲や人間関係などに、いつまでも縛られず、今の泥沼のような状態の中から這い出す為に、糸口を見つけるためには、より大きな力が必要だと思います。細い糸の一本一本を寄り集め一本の太い糸にするために、女性同志がもつとお互いに歩み寄つて理解を深め合いましょう。世界中の、どの国にとつても農業が消滅して良いなどということはあるはずがないのです。眠れる獅子を起こし、明るい農業への道標をつけるために、これからも頑張って行きたいと思いますが、皆さんには、どう思われますか？ まずは、

自分自身の可能性に懸けてひとつひとつ問題を解決して行きましょう。そうすれば、自ずと道は開けてくれると思うのです。

円丁 康子

農家が大変だと言われるのは、仕事がキツイ、キタナイ、クライといった外見しか見えていなからなのではないでしょうか。中味は地味でささやかではあるけれど、とても人間として豊かな暮しがあるのです。でもそれは内側であるがゆえに伝えにくく、農家の人がさえ忘れがちです。

私は高校一年生の時、生まれて初めて農家に実習に入りました。酪農の仕事に触れるのが目的だったのですが、強烈な印象を受けたのは仕事ではなく、家族の人達でした。おじさんやおばさんの顔は、今までに見た事がないくらいツヤツヤ、ピカピカしており、大きな笑い声が絶えず、子供達はとても人なつっこいのです。「これは何がある」と、とても農家にひかれました。

仕事は確かにキツイけれど、終えた後は爽快感があり、やつただけ形として残ります。牛舎仕事は

確かにキタナイけれど、トラクターやトラックで広い草地を走ったり、広い庭の好きな所に花を植えたり、子供と牛を追う事も仕事なのです。クライと思われるのは、たぶん真剣に働いている時の顔つきからくるものなのかもしません。太陽の下で力一杯する仕事は暗いわけありません。仕事の合間に自動車で行きたい所へ行けます。3Kというのは半分は当たりのとしても、それを相殺する以上の大変さもこれまたあるのです。

農家の仕事を体験するとか、見学するとかだけでは本当の農家の良さを理解するのは難しいと思します。農家に入つて初めて、肌で感じる事がたくさんあるのではなないでしょうか。仕事だけでなく、四季折々の野山の恵みや、作物・牛等を育てるという喜び等々、地味ではあるかも知れないけれど、幅広い農家の暮しぶりを更に踏み込んだところまで、非農家の人は達にも知つて欲しいものです。

と同時に、農家側もないものねだりばかりでなく、自然の中で生きる不便さと表裏一体の農業の良さを誇れるように、自分達の暮し

を見つめ直して欲しいと思いま  
す。文明の不便さの中で生きてい  
る都會の人達を見つめることによ  
つて。

そういう意味で、組織同志の交  
流ではなく個人同志の深い交流が  
できれば、僻地で出無精な私は  
考えています。

田端 弘子

真摯に農業に取り組む生産者の  
方々と、女性の視点で率直な話し  
合いができる機会を得て、ほんと  
うに幸いでした。今後も、息の長  
い交流をさせていただきたいと思  
いました。「農業」、特に「北海  
道農業」を「自分の問題」として、  
生産と消費の両面から話せる下地  
づくりが可能なんだ、という実感  
が得られたことで、今後の方向が  
見えてきた感じでした。しかも、  
「女性の視点で農業を見る」とい  
は、生産と消費の「環」を作る意  
味で有用な方向だと思いました。  
そこには、「売り手と買い手」の  
関係から生じる「サービスと要望」、  
の域を越えて、生活が語りあえ共  
感し合える関係ができるからだと  
思います。

「一歩さつぽろでは産直に対す

る会員の支持が高く、アンケート  
による会員の期待は、①安全性(安  
心)、②味(品質)、③価格の順  
です。産直なら、どこで、だれ  
が、どんな作り方(農法)をした  
のかが分かる。つまり、氏姓が  
確かなことが“安心”を求める消  
費者(主婦)意識に合致するのだ  
と思います。特に最近は、他県に  
比べて環境汚染度の低い道内農業  
に期待が強く、加えて「有機農法」  
への関心が急速に高まっています。

低農薬すいか、有機米など減農  
薬、有機栽培に取り組む生産者と  
の産直についてのアンケートに示  
された高い支持率が、会員意識を  
裏付けています。

全国でも、京都生協の「クリー  
ン農業」、一歩さつぽろの「フー  
ドプラン」、宮城生協の「共同声  
明」などの産直の前提基準の設定  
があります。一歩さつぽろでも、  
生活研究所に「農法問題研究委員  
会」が設置され、当面のテーマを  
産直問題と農薬に置き、理事会へ  
の答申に向けて作業中です。農業  
研究者や、生産者からの情報・研  
究の交換をベースに、生産者と消  
費者を結ぶ絆になる「表示」に結

びつけたいと考えていろいろで  
す。

生協の役割は、農業と正面から  
向き合う真摯で先進的な生産者と  
の産直を拡大・定着させ、道内に  
より多くの先進的な生産団地をつ  
くるパートナーの機能にあると思  
いました。

その機能を有効にするために  
も、ぜひ、女性同志の交流を深め  
たいものだと実感しました。

赤城 由紀

人づくり(教育)も農作物づく  
りも「規格化」に終始するようにな  
なってからどうもおかしくなって  
きたように思います。教育も農業  
も本来の持味を無視したブランド  
化が進んでいます。でも、それは  
いつたい誰の為になっているのだ  
ろうかと考へ込んでしまいます。

農産物の廃棄率が商品化率を上  
回るような現実はどうしておこる  
のでしょうか。これは消費者と生  
産者の間に立つて通訳や翻訳をし  
ている人たち、例えば流通関係者  
やマスコミあるいは教育諸機関が  
きちんとその役目を果たしていない  
からではないでしょうか。

たこの、消費者は生の情報を手に  
入れることが出来ました。「大き  
さが不揃いでも安全で美味しい」  
「土付きの方が鮮度がいい」とい  
うこと、あるいはその農産物に  
ふさわしい調理方法を直接聞き、  
生産者の苦労を農産物と一緒に貢  
つてくることが出来ました。

す。自己完結型で閉鎖的な人間社会が形成されていくのは当然といえます。これからは「よそ者」を

マイナスイメージではなく、プラスイメージで受け入れていける地域が生き残つていけるのではない

でしょうか。

座談会で「一緒にさせていたい

た就農者の方たちは頼もしいかぎりだと思います。自分のやつている仕事が楽しくて仕方がないと言

い切れる人が都市生活者のなかにいるのでしょうか。こういう方たちが将来の農業の牽引力になつてい

くのだと想います。

「離農は簡単でも就農は難し」

というのが日本農業の現状でしよう。しかし、離農する人が多くなつたなら、その分農業をやりたいと思つている人に農業をさせやすい体制や法律を作るべきです。「どうやつたら普通のサラリーマン世帯が農家になれるか」ということを知つている人は少ないでしよう。

分かったからといってすぐに農業を始める人はいないかも知ませんが、農業に対する関心は高まるのではないかでしようか。

消費者と生産者の交流が盛んになつてきたとはいって、まだまだ心

理的にも物理的にも距離があります。元気な女性たちが注目される時代になつた。もはや「女性の社会進出」は当たりまることになり、「女性の地位の向上」などという言葉自体、もしかしたら、時代遅れなんじゃないかーと思つてしまふほどだ。

でも、本当にどうなのだろうか。最近、この「女性の時代」にある種の「うそくささ」を感じる。確かに、さまざまな職場に女性の姿が増え、男性より目立つ仕事をしている場合も多い。商品開発のターゲットは女性であり、選挙になれば、女性票の取り込みが当落の決定に大きく影響する。しかし、本当に女性の地位が向上したのだろか。肝心の政策決定の場での、あの男性集団を見ていると、もしかして、女性はおしゃか様の手の上で、右往左往しているだけの孫吾空に過ぎないのではないかと懷疑的な気分になる。

今、「女性の生活情報紙」をキヤッフフレーズにしているフリー

理的にも物理的にも距離があります。元気な女性たちが注目される時代になつた。もはや「女性の社会進出」は当たりまることになり、「女性の地位の向上」などという言葉自体、もしかしたら、時代遅れなんじゃないかーと思つてしまふほどだ。

## 松井 歩

ページの編集に関わっているが、「なぜ、今、女性なのか」を常に自問自答している。女性誌のほんぶりはすさまじく、しかも、女性誌の内容はどれも、似たようなものばかり。

「ようやく、女性誌が女性に追い付いた」。こんなコピーで売り出した女性誌もあつたが、それなら、女性は「ちょっと遅れた雑誌」から「最新情報」を得ていたのか

こと、情けなくなつてしまつ。女性誌をはじめ、現在の女性ブーム全般が、ちょっとだけ時代感覚に勝れた男性側の、「これから

の女性はこうなるんじゃないか」という発想によつて作りだされたものなのではないか。今回の座談会に出席して、なぜか、こんなことを考へてしまつた。

今は、女性の時代などと浮かれてはいられないのだ。男性も含めて社会の在り方から生き方までを真剣に考えなければならない時だと思う。少なくとも、これまで、体制決定の場から遠ざかれていた女性だからこそ、今までの間違いも指摘することができるはずだ。そのため、女性自身が母親や祖母たちが歩んできた道のりを、しっかりと見据え、自分の目で見たこと、考えたことを声に出せるよ

に比べると、「職住接近。しかも、物を作り出す」というすばらしい仕事をしているんだから、ぜいたくな悩み」と言つってきたのだが、決してそうではないことがよく分かった。

これからの農村や農業は、女性だけで作るものでもないし、まして、男性だけが考えるものでもない。農産物自由化の波を受けて、世界的規模で農業の在り方を考えなければならぬ時だからこそ、農村や農業自身からこれまでの古い体質を見直す絶好の機会ではないだろうか。

今は、女性の時代などと浮かれてはいられないのだ。男性も含めて社会の在り方から生き方までを真剣に考えなければならない時だと思う。少なくとも、これまで、体制決定の場から遠ざかれていた女性だからこそ、今までの間違いも指摘することができるはずだ。そのため、女性自身が母親や祖母たちが歩んできた道のりを、しっかりと見据え、自分の目で見たこと、考えたことを声に出せるよ

いつもため息をついている。子供を育てながら職場と家を走り回つてゐる私の周囲の女性たち

# 牛乳流通の広域化と酪農構造問題

宮城教育大学 助教授 小金澤 孝昭

農産物市場研究会（田井晋会長）主催により、平成三年十月四日には北大で「市場開放と農産物市場・流通再編」をテーマにした九十年秋季研究会が開催された。秋季号の「牛肉自由化と市場再編」に引きつづき、ここでは研究会での「牛乳分野」の報告概要を小金澤助教授にまとめてもらつた。（編集部）

## はじめに

このところ構造問題が関心を集めている。牛肉自由化が行なわれ、乳製品の自由化が叫ばれ、農業とりわけ畜産の構造が大きく変わりつつあり、また変わることが予想されているからであろう。しかし、市場開放による外部からの構造変化を予測し対応することも重要であるが、構造は日々の生産・流通、

消費によって刻々と変容していることも事実であろう。外部からの構造変化とともに国内の現在の農業構造の変化に注目し、かつ国内の農業構造が外部からの構造変化の力とどのように結びついていくのかがもっと議論されるべきであろう。牛肉自由化の時も自由化の予測がたくさん議論されたし、現



在の米も同様である。自由化議論に関心が集まる中で着実に米の流通自由化が進められていく。そして米の流通自由化が米の輸入自由化の呼び水となる速鎖が生じている。

さて、酪農も他人事ではない。

乳製品の自由化が議論されている。外部からの圧力によって酪農構造も大きく変わることが予想されている。輸入乳製品による国内市場の侵食とともに現在の日本酪農の基礎となっている不足払い制度のあり方が修正されることなどが指摘されている。しかしながら、今もっとも議論されなければならぬことは、生産調整の下での酪農家の減少、乳価の低位固定化・脂肪分比率の引き上げによる実質的な乳価切り下げ、牛肉自由化による牛仔牛価格の下落による酪農経営危機といった酪農構造がどのようにつくられてきたのか、そしてこの酪農構造の深化の延長線が輸入自由化とどのように結合していくのかということであろう。

本報告では、酪農構造をつくりだす生産構造と流通構造のうちと

くに後者について検討を加えながら、現段階の酪農構造がどのように

につくられてきたのかを考察することを課題とした。

## 牛乳流通の広域化と進展

### 広域流通の進展

牛乳流

通の広域

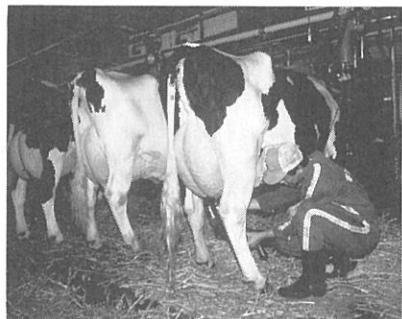
化は、いまでもなく生乳・飲用牛乳の地域間需給の変化によって生まれてくる。東京のような大消費地の周辺に形成されていった都市近郊酪農地域からの生乳供給では飲用牛乳の需要に追いつかなくなれば、生乳を保存性の強い加工乳製品に仕向けていた消費地から距離的に離れた加工原料乳地帯から送乳しなければならないからである。この生乳・飲用牛乳の地域間需給の変化を一九六五年、一九七五年、一九八五年とみたものが図1の①～③である。生乳生産量は、飲用牛乳需要が高い大消費地をもつ関東や東海、近畿と北海道、東北、九州にピークをもっていたが、一九六五年以降の変化としては北海道が急成長していること、またこの北海道と東北・関東・九州の伸びに対して東海・近畿が相対的に

生産上の地位を低下させていることである。生乳生産の分布は、大消費地をもつ関東を除けば、国内の周辺部である北海道・東北・九州に移行しつつあることがわかる。飲用牛乳の処理量は、牛乳が処理された生乳は、ほぼ関東、東山に広がっていだし、一九七七年には秋田県を除く東日本全域から搬入を受けており、生乳流通の広域化は一九六六年の不足払い制度以降、急速に進んでいったのである。また飲用牛乳においても、一九六六年では首都圏で消費される飲用牛乳はほぼ首都圏で生産されていたが、一九七七年には関東・東山・東海からさりには岩手県や北海道からも飲用牛乳が製品として搬入されるようになっていた。生乳・飲用牛乳流通の広域化は、こうして地域間需給を乗り越えて進んでいったのである。なぜならば生乳・飲用牛乳の広域流通は、物流的には地域間需給の不均衡をうめ形で進むが、他方では生乳に

的につくられたのかを考察するのまま加工原料用の処理量の伸びにつながっている。

生乳と飲用牛乳、乳製品の地域間需給をみると飲用牛乳の不足する東海・近畿に生乳が移動することが予測される。しかし、実際は生乳の地域間移動をみると、一九六六年段階で首都圏の工場に搬入される生乳は、ほぼ関東、東山に広がっていだし、一九七七年には秋田県を除く東日本全域から搬入を受けており、生乳流通の広域化商品であるため、消費地での処理が原則となっている。そのため、飲用牛乳の処理量は、牛乳が処理後の鮮度(日付)をも重要視される関東・東海・近畿に飲用牛乳の處理のピークがくる形は、一九六五年～八五年にかけても依然として崩れていらない。しかしながら、九州・東北・北海道も処理量を徐々に伸ばしている。生乳生産量と飲用牛乳処理量を対比すると、東海に生乳の生産量が下回り、飲用牛乳向けの生乳量が不足する事態が年々強まっている。関東では不足という事態になっていないものの、徐々に不足の事態に近づいている。乳製品の生産量は、北海道が圧倒

おいては生産者の手取り乳価格を上昇させ、飲用牛乳においても乳業メーカーの市場拡大、メーカーを介した生産者の手取り乳価上昇を実現するための販売戦略だからである。一九六六年の不足払い制度以降、各都道府県に設置された指定団体が生乳を一元集荷し多目的に販売するしくみになつたため、従来のように生産組織が乳業メーカーの系列の下に置かれ、市乳地带、加工原料乳地带といったメーカー側から規定される地域分担は崩れた。指定団体は制度上でこのメーカーにも生乳を販売できるようになつたのである。また不足払い制度の下では、生乳価格は



飲用牛乳向け価格と加工乳製品向け価格の二つからなっている。飲用牛乳価格の方が加工原料乳価格より高いため、生産者は生乳をより多く飲用牛乳に仕向けられるようになることになる。こうしたこと背景に、生乳流通の広域化は一つは指定団体が飲用牛乳向け販売比率（市乳化率）拡大のために、全農や全酪連などの全国連の販売経路に依拠して大消費地へ生乳を販売すること、二つは指定団体が東京市場などの大消費地に市場参入を果たした飲用比率の高いメーカーに販売すること、三つは、従来からあつた大手乳業メーカーによる全国の工場ネットワークを利用した工場間転送によつて

**広域流通の要因**  
では、従来と異なつて、こうした牛乳流通の広域化を可能にした諸条件はどういうものがあるのだろうか。一つは物流上の技術革新である。牛乳という液体で腐敗性の高い商品を輸送する装置・手段の開発である。生産農家のクーラーからタンクローリーという物流経路の確立である。二つは製品流通上の技術革新、紙パックの普及・定着がある。紙パックは一方通行で使用後は廃棄されるので、従来牛乳ビン宅配で行なつていたビンの回収が必要になつた。このことは、従来大手乳業メーカーが宅配による牛

帶、加工原料乳地带といったメー

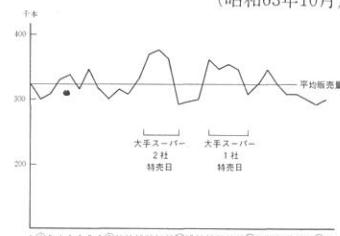
カーサイドから規定される地域分担は崩れた。指定団体は制度上でこのメーカーにも生乳を販売できることになったのである。また不足払い制度の下では、生乳価格は

進んでいったのである。

### 広域流通の要因

では、従来と異

### 飲用牛乳の日別変動—首都圏— (昭和63年10月)



資料:X乳業資料による  
注:○印は日曜  
出所:『余乳調整の現状』矢坂論文より引用

図-1  
牛乳の生産と処理

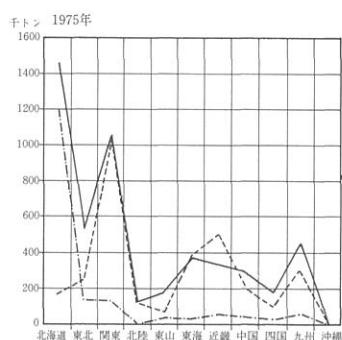
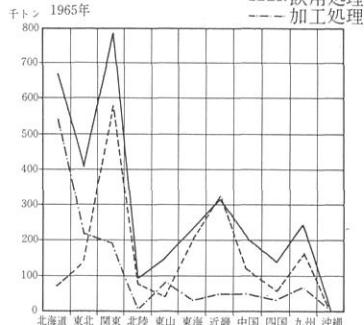
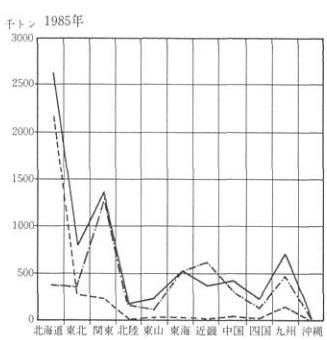


図-2  
飲用牛乳の日別変動—首都圏—  
(昭和63年10月)

乳専売店のネットワークを使って消費市場を組織していた状態が崩され、従来市場に参入していなかつた乳業メーカーの新しい流通経路を使っての市場参入を可能にしたのである。三つは、紙パックの導入を確実にした新しい流通経路を使つての市場参入を可能にしたのである。紙パックの導入を確実にした新しい流通経路、量販店の進出である。紙パック自体は一九五二年に日本にも導

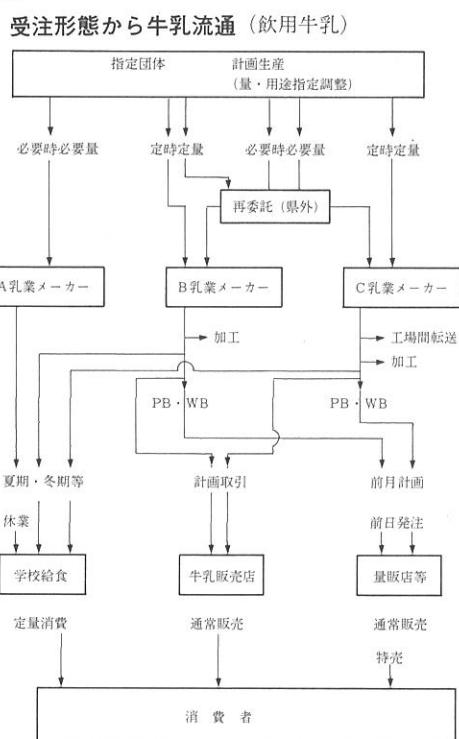


資料:牛乳乳製品統計

入させていたが、紙パック流通が盛んになるのは、流通革命の中で成長してきたスーパー・マーケットが回収のいらぬ紙パックによる牛乳販売を増加させた一九七〇年代に入つてからのことである。量販店による新しい流通経路は、牛乳専売店による流通経路をしおり、一九七一年全体流通量の一〇〇%であった大規模店経路は一九八〇年には四七%、一九八八年には六八%にまで成長してきたのである。新しい流通経路の急成長は、前述したように乳业にとっても新

しい市場の出現となり、市乳化率の上昇を望む消費地から遠い生産者と結びついた乳业も成長していくのである。四つめは消費者の牛乳に対する認識の変化である。紙パックの普及や新しい流通経路の出現があつても、大手乳业メーカーのシェアは急激に減少しなかつた。それを変えたのは、消費者意識の高揚と全農が一九七二年に販売した「成分無調整牛乳」の普及であつた。従来の牛乳は加工乳主体で、乳脂肪分を調整したり、乳製品を還元して製造されてい

図-3



出所：ヒアリングにより作成『余乳調整の現状』

た。これは原料乳確保の変動を、保存性の効く乳製品の還元によつて補うもので、一九六九年には飲用牛乳生産量のうち五〇・四%が加工乳で占められていた。「成分調整牛乳」は生乳の成分を変えないで処理するもので「自然はおい

### 広域流通への対応

このよ  
うに進ん  
だ

域流通の下での流通構造が再編成されていった。指定団体では、市乳化率を高めるために新しい取り組みを実行し、全国連への再委託を通じて行い。市乳化率の低かった都府県の加工原料乳地帯では

ぐに首都圏に近く、従来からの乳业メーカーと直接的取り引き関係が強い指定団体を除いて、指定団体の一元集荷多元販売の機能が高まつていった。この過程で指定団体は、集送乳路線の整備やクラーステーションの再配置を行い、広域流通に対応する販売体制と物流体制を整備していった。

乳业メーカーでは、大手乳业メーカーが従来の集乳地盤に変化が起きたため、都府県内部の加工乳製品工場の再配置を行うとともに、新しい流通経路に対応するために、量販店との結合を強めていた。新しい流通経路の成立は、中小乳业とくに農協系プラン

## 牛乳流通の広域化と流通構造

しい」のコピーとともに消費者に支持され、飲用牛乳の主流が加工乳から「成分無調整牛乳」へと変化した。このことが、より一層乳业メーカー間の市場競争を激しくし、牛乳の広域流通を促進させた。

乳製品を還元して製造され、経費を引いても市乳化率をあげる販売戦略が生産者の手取り乳価を引き上げることになったからである。この過程で一部の指定団体と

急成長を遂げていった。このことは、生産者にとってみれば市乳化率を高めるという点では大きなメリットを与えたが、流通機構全体にとってみれば、量販店の牛乳流通上の地位を飛躍的に高めたことと、加工処理施設をもたない農協プラント・中小乳業の成長は、従来大手メーカーが果たしていた工場間転送による需給調整機能を後退させ、処理の行き場のない余乳の発生を深刻化させたことが指摘できる。

量販店は、牛乳という商品が日配商品であり、生活必需品であり、単価が高く、取り扱いが容易であり、商品回転率が高く、さらには特売商品として使えるといった数多くの利点をもつた商品であることに注目して、牛乳を大量に扱うようになってしまった。また各量販店の名前を冠したプライベートブランド（PB）や量販店と乳業メーカーの両方名前を冠したダブルブランド（WB）をつくりながら、乳業メーカーを組織していった。とくに物流面では、在庫調整を乳業メーカー側に負担させる

体制をつくり、図-2のような前日発注方式で注文数を日々変更する取り引き体制を定着させていった。

### 流通構造の変化

各流通

主体の対応によって形成された広域流通の下での流通構造は以下のような特徴を生み出していった。

一つは量販店主導型の流通経路を生み出し、前述したように乳業メーカーに生産計画を日々変動させるといった不安定要素を内包させていた。これは図-3の牛乳の取り引きの経路からして、生産者から乳業メーカーへその多くが定時定量で流れいくものを川下段階で不規則な流通を発生させることになり、余乳の発生など牛乳流通に混乱をもたらす要素を生み出した。

二つは広域流通の下で、全国連絡機能が強まっていく中で牛乳流通を生産者の側で調整する機能をもつ反面、定時定量以外の生乳の販売では販売先を求めて迂回的な流通を生み出していく。

三つは工場の再配置が進行していったことである。図-4・図-1



5は、一九七五年と一九八四年の飲用牛乳工場と乳製品工場の分布を示したものである。飲用牛乳工場の分布の特徴は、工場数が減少していること、工場の製造能力の規模が拡大していることである。学園給食等に依存している零細規模の飲用牛乳工場は減少し、生産規模の大きな工場が大消費地周辺に集中立地する傾向を示している。

飲用牛乳市場をめぐる乳業メーカー間の競争が激しくなっているため、こうした傾向が強まっている。乳製品工場の分布の特徴は、大規模な工場が北海道に集中していることと大消費地周辺の乳製品工場の大規模工場が集中的に立地し、関東・東北・九州などは余乳や加工向け生乳の処理調整工場が、そしてバター・チーズなどの工場が北海道に集中立地するという乳製品工場の地域分担が形成されつつある。こうした工場の再編成は、生乳流通や飲用牛乳流通の地域間流通の骨格を誘導する特徴をもつて、牛乳流通の広域化による乳業メーカー間の競争がある程度一巡してくると、工場配置の主導権をもつ大手乳業メーカー・大規模農協プラントが今後の牛乳流通のシステムを新たに生み出すことが予測できる。

四つは依然産地間競争は進んでおり、都府県の周辺部の市乳化率の上昇に伴い、都市近郊酪農地帯の市乳化率が減少し、從来加工における発生がほとんど無かったこの地域では生産者の手取り乳価が低下する事態となつた。都市化の進行、

畜産公害の深刻化と合わせてこの

地域での乳価格の低下は酪農家の生産意欲を減退させ、酪農家の減少を誘導している。こうした過程で酪農家数も都府県で減少し、徐々に生産地域が変動していくのである。

五つは、広域輸送や小売流通での量販店の主導権が強まる、輸送費の生産者負担が増加し、乳価も低位固定化し、さらには一九八七年の脂肪基準の上昇による乳価の実質的切り下げが行われたことである。ところに脂肪基準の上昇は、従来の飼料供給方法が変更されるなど生産者の負担が一層強まる」ことになった。

## おわ りに

広域流通によって生み出された流通構造の諸特徴は、互いに関連しながら新しい流通体系をつくりあげていく。その大きな問題点の一つは、牛乳生産の地域格差の形成である。飲用牛乳・乳製品工場の再編成、量販店主導の流通、産地間競争、酪農家数の減少によって、都府県の酪農が近年急速に衰えて、都府県の酪農が近年急速に衰えて、都府県の酪農が近年急速に衰

六つは、余乳の発生の深刻化である。乳製品工場の再編成で学校給食が休みになる時に顕著に発生する余乳を処理する場所が少くなり、飲用牛乳の販売競争が激しくなる中で急成長した加工施設をもたない飲用牛乳プラントが増加し、また量販店の日別注文量の変化が飲用牛乳の計画生産を困難にする。こうして行き場を失った生乳が生まれるのである。この生乳が廃棄されれば問題はないが、それが飲用牛乳向けに転用されれば、飲用牛乳流通のルールが混乱する」とことになる。

六つは、余乳の発生の深刻化である。乳製品工場の再編成で学校

給食が休みになる時に顕著に発生する余乳を処理する場所が少なり、飲用牛乳の販売競争が激しくなる中で急成長した加工施設をもたない飲用牛乳プラントが増加し、また量販店の日別注文量の変化が飲用牛乳の計画生産を困難にする。こうして行き場を失った生乳が生まれるのである。この生乳が廃棄されれば問題はないが、それが飲用牛乳向けに転用されれば、飲用牛乳流通のルールが混乱する」とことになる。

図-5 地域別乳製品工場の分布 1975

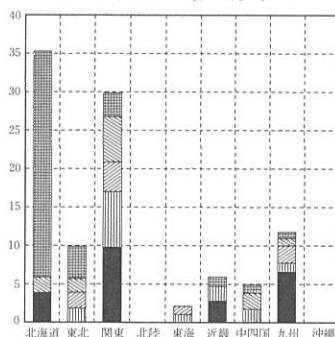
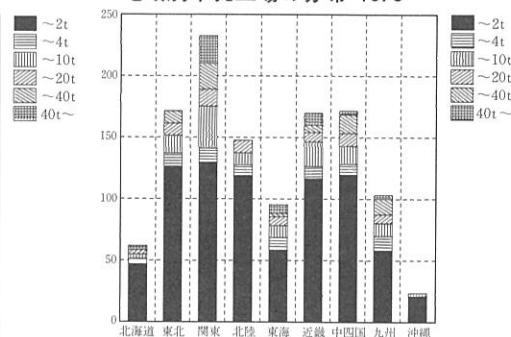


図-4

地域別牛乳工場の分布 1975



一流通システムが確立されたため、特売などが行われる末端価格は上昇しにくくなるのである。いずれにしても、現在生産者が抱える構造問題の根の一つに流通構造の変

図-5 地域別乳製品工場の分布 1984

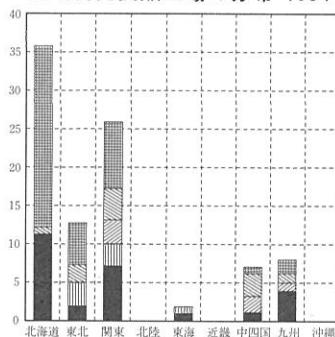
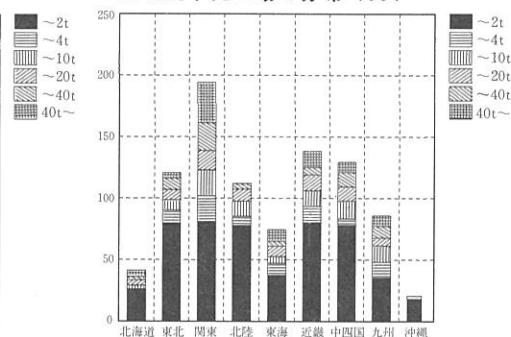


図-4 地域別牛乳工場の分布 1984



遷があることはまちがいない。絡まりかたを模索することが今求められている。

# BOOK REVIEW

## 「都市と農村の交流」

山口大学

教授 小川 全夫 著

ここで取り上げる『都市と農村の交流』（執筆・小川全夫山口大学教授）は、農政調査委員会の機関誌として知られている「日本の農業」シリーズ一七七号として発行されたものである。「都市と農村交流の意義」、「都市住民の二・三の変化」、「農村住民によるシズの変化」、「都市と農村の交流の社会的効果」、「展望と政策課題」といった興味深い構成が目を引く。

さて都市住民と農村住民の交流ニーズのミスマッチは、主として

過疎対策にこだわる農村住民の意図と、もっぱら都市化にともなう社会解体と、社会病理からの脱出を目指す都市住民の志向との乖離に由来する。以下に「交流の社会的効果」および行政による支援策のあり方について展開されている部分を紹介したい。

レポートでは、都市と農村の交流に関する社会的効果を3つに分けてとりあげている。第一は、自由競争原理に基づく「市場」の領域であり、淘汰を避けられない生き残りをかけた競争社会の原理を

前提としている。リゾート・観光産業の進出がその例としてあげられる。

第二は「行政」領域である。誰も法の下での公平な扱いを要求し保障される人権をもつており、地域格差に関しては税という財の再配分による均衡を前提としている。例えば比較的生産性の低い分野をうけもって食料供給を行い、労働力の供給を行ってきた農村に対することは合理的であった。こ

の農村への期待が変化して国土環境保全機能やレクリエーション機能へと向かっているとする。

第三は「族・党・講組・会」などの互恵的関係領域である（これら三領域の問題点も指摘されているがここでは省略する）。いわば、ボランティア活動の領域であり、インフォーマルな関係と集団の形成を前提としてもたらされるものである。これらの三領域のせめぎあいが社会的効果の実質を構成しているという。

点として、①形式因（農村の個性に対応する統一テーマにもとづくイベントなど）、②目的因（共通の目的をもつ都市と農村が国に対して働きかける）、③資料因（地域資源の有効活用と保全のための環境保全基金、特定入会権などの法的整備等）、④動力因（交流活動の担い手育成等）を提起している点は今後の議論の整理にとっても有益であるといえる。

またこのシリーズのユニークな点は、執筆者による口頭報告の後で関係者による合評会が掲載されていることである。（昭和三十年代当初から地道に続けられている）今後、CD、DVD対応の出版物が増加していくことを考へるならば、こうしたコメント付きの出版企画は貴重なものといえ、大いに評価すべきであろう。

農政調査委員会

日本の農業一七七『都市と農村の交流』一九九〇年十月発行  
一、二〇〇円

評者 北星学園大学文学部  
助教授 杉岡 直人

# 農協の企画・開発部門の機能

## —解説—

(社) 北海道地域農業研究所

常務理事　富田義昭

企業における企画・開発部門は、厳しい環境に対する経営戦略を樹立・推進する重要な部門として位置づけられ、中・長期の経営計画、経営革新、新規事業の開発、新商品開発、マーケティング戦略など多様な機能を果たしている。

農協組織でも、これまでの農協大会等で新しい時代に即応した取り組みが提唱されている。しかし、実践状況となると遅々としており、取り組みの農協間格差が見受けられる。

(財)北海道農協学校では、昨年十月、平成三年度短期研修コースとして、企画管理業務担当者を対象にした研修が行われた。その中の科目の一つとして「経営環境と企画開発機能」について講議依頼

があり筆者が対応した。このコースは学校側も受講者も期待が大きいことから、講義を応諾した筆者としては責任の重大さを考え、いろいろな角度から資料を集め、整理の上準備を行つて臨んだところ、期待に反しわずか九人の参加であった。人材養成に対する先行不安を痛感した。

この機会に研修科目の話題と、アンケートによる受講者の反応を紹介すると共に、全道の農協の組織・機構の名称の中から企画開発部門の位置づけ、機能などについてまとめた。

第二十回北海道農協大會議案の一つである「新時代を展望した組織・事業の改革と競争力ある農協づくり」に向けて実践する役職員の使命は重要である。意識高揚のため名称と機能の一新を試みることも必要と考え、その一助となれば幸いである。

農協学校では、この研修コースは農協経営の中枢となる人材養成のため必要性を考慮し設定したものであるが、一々一年間の推移の中で、参加者が少ないこともあり、内容の点検・見直しを行い、平成四年度には「営農企画部門研修」に独立し、地域農業振興に係る諸問題の専門的研修コースとする意向のようであるが、筆者としても管理企画と区分することに賛成である。

## 企画管理者研修会の概要

農協学校の短期研修の専門別コースの一つとして位置づけされ、六日間三十人で計画されているが、前年度に引き続き今年度も人数不足

り組み、⑤農協の長期経営計画、⑥農協の経営管理——など数多い課題である。

今回の受講者は九人と少ないが担当業務は企画管理、総務・経理、電算、経営強化・対外広告と多彩

で、年齢は二十九歳から五十三歳と幅広く平均年齢は四十一歳で、中堅からベテランの管理職だった。

受講者は自分の意志で参加した人が四人、上司の指示による人が五人だった。参加予定者で、間際になって不参加もあり、この種の研修には自分が希望しても、日常業務に追われ参加できにくい農協内の環境にあるとも思われる。

農協学校では、この研修コースは農協経営の中枢となる人材養成のため必要性を考慮し設定したものであるが、一々一年間の推移の中で、参加者が少ないこともあり、内容の点検・見直しを行い、平成四年度には「営農企画部門研修」に独立し、地域農業振興に係る諸問題の専門的研修コースとする意向のようであるが、筆者としても管理企画と区分することに賛成である。

# 経営環境と企画開発機能の講義

筆者の担当した科目は四時間であり、テーマに対する内容は、「経営環境の変化に対処する企画開発機能になにが要求され、どう展開するか」であった。

## 農協の企画開発部門の状況

平成三年版の農協年鑑から全道の単位農協組織機構の中で、企画の名称を使っている農協は七十農協で、このうち管理企画は五三、営農企画は二二、店舗企画一があり、性格が異なる業務にまたがっている（合計が合わないのは、同一農協内に二つの企画部署があるため）。

また、開発の名称を使っている部門は二〇農協と少ないが、これも地域開発、宅建開発、商品開発、営農・研究開発と多様な業務になっている。

今回の受講者は必ずしも企画・開発部門の職員とは限らない。どういう業務を担当しているか、どうということに関心を持つか判らない。したがって、幅広い話題を

展開すべく資料を準備した。

### 話題の内容と結果

話題の展開は、①経営環境変化と経営計画、②企画開発機能の必要性（何が要求されるか）、③企画開発の展開（どう展開するか）――とした。

さうに、それぞれ小項目に区分

したが、③については具体例として、農協の農業振興計画、ホクレンの中期計画の紹介を行う他に、マーケティング戦略の開発、新規事業開発（とりわけ農業分野の新規事業開発の具体例を示した）。また、事業の組織の改革に関する企画と実践について、ニューカオリティ運動、ホクレンのトピック運動の実践と成果、地域農業ガイドポストの実践例、農業情報システムの企画開発にもふれた。

## 農協の組織・機構の変化

### 新時代の農協とは

第十八回全国農協大会（昭和六十三年）では、二十一世紀の農協としている。

これらの話題に対する受講者の反応は、終始熱心に聴講する姿に接したこと、また、アンケート結果でも全体感想として、全員が参考になったと答えた。理解度で

は、やさしい、普通との答えは七名（七八%）で、むずかしいとの答えは二人（二二%）であった。

項目別関心度では、マーケティング戦略の開発、新規事業の開発、戦略的経営の展開と経営計画に強い関心を示した。他の全項目についても関心が持たれたことは幅広い業務を担当している人達だからだと思われる（図1-1）。

話題と資料内容について、充分

だったとの答えは一人（二二%）、やや充分との答えは六人（六七%）であったが、不足との答えは一人（一一%）だった。これはテーマをしぼってほしかった、具体的な事例（例えば農家労働の請負組織の設立）による。

自由な感想・意見の記入の欄で寄せられたことについては紙面の都合で紹介できないが、今後の研修・講義に対する貴重な提案・要望が数多く記されており、筆者自身の反省材料になった。

協大会（昭和六十三年）でも、ニューカオリティ運動の実践、農協合併構想――など今後の農協運営に係わる重要な決議がなされている。そして昨年（平成三年）の全国大会・北海道大会へと時代が流れ、北海道の農協が果たされた中で、北海道の農協が果たしてどのように組織・機構が変わった。

企画開発部門は幅広い分野である。しかも参加した人は総務・経理となり、資料のボリュームが多くなり、時間不足があつたこと、他の講師とのテーマ・内容の調整など全くない今までの対応を反省したところである。

であろうか、五年前との比較をしてみた（表一）。

### 企画の名称を使った部署

企画の名称を使用している農協の数は余り変化がみられない。わずかに営農企画が増えた程度である。地域によっては減少しているところもある（空知、日高など）。農協では企画部門を農業・農協の振興計画策定の臨時機構として位置づけするなど、農協の組織・機構の名称にはなじまないのが現時点の見方であろうと思われる。

### 開発の名称を使った部署

一方、開発の名称を使用している農協の数は、五年前に比べ倍になつていている。前記したように業務は多様であるが、農協の新しい部署として位置づけされ、徐々に増える可能性がある。とりわけ、都市化地域の大型農協、広域合併農協、事業革新について積極的に取組もうとする農協の姿の表われと見受けられる。

### 振興・対策室

#### 名称を使った部署

最近の農協組織・構機の名称で目立つのは、農業振興・経営振興

などの部署である。前向きの取り組みとみられる。一方、対策室の設置も多くなっている。但し前後する名称から判断すると、積極的事業展開に結びつく部署と思えなものが多いようである。しかし、プロジェクトチーム編成の対応窓口として小人数のスタッフを置く臨時機構も場合によっては必要であり、対策室の機能も多様な形となって農協組織機構に位置づけされている実態にある。

### 連合会の組織・機構改変の例

ホクレンでは経営白書策定以来（昭和四十七年）中期事業計画も五サイクル目である。この間トピック運動（業務・事務生産性向上運動）など実践の中から組織・機構再編等が幾度か手がけられ、事業本部の統合、研究開発の強化、マーケティング本部の創設、新規事業の着手、人員の再配置を行うなど、新时代に対応するため企業マインドの改変を行つている。こうしたことまとめた「ホクレンの経営革新——TOP—O運動——〇〇〇日の軌跡」の出版物が日本能率協会から出版され、全国に

紹介され、系統内外から注目された。道内の農協の中にもトピック運動がすすめられている例もいくつかある。

### 中味がよければの考え方もある

「名は体を表わす」といわれるが、企画・開発が農協の機能にとつて重要な意識改革に取り組むための認識に立つのであれば、名称についてもこれから検討課題として考慮する必要がある。

もちろん、全道の農協の中には従来の名称（総務・管理、営農・生産、金融・信用、共済、購買、販売、利用・加工、生活・店舗）

のままで、優良な実績をあげ、しかも新規事業にも積極的に取り組んでいる農協も数多くある。これらの農協は概して一定以上の事業規模、人員が整っている場合である。

要は組織・機構をつくればよいという考え方だけではだめである。今後農協の業務がますます複雑多岐にわたることが想定されるので人材養成のための教育訓練と、適材適所への配置が必要となろう。

こうした体制充実が可能になる

ためには、農協合併の必然性を感じるので、合併の必要性が強調されるやうである。

## むすび

当研究所設立後一年間の業務を通して、また、この間市町村や農協に対し加入推進や、活動状況報告のため、数多くの農協を巡回した。その中で地域間・農協間の格差が拡大していることを実感した。地域農業振興に対する市町村役場・農協の取り組み、とりわけ農協の企画・開発の重要性を再認識したところである。

また、当研究所の認知度などについて、アンケート結果からみて、まだまだ低いことが判った。今後、調査・研究の実績を積み重ねるとともに、あらゆる機会を通して啓蒙することが必要だと考えられ積極的に取り組みたい。

今回の研修は筆者にとって誠に大役であったが、これまでの農協と、これから農協のあり方を考える絶好の機会であり、試練の場を与えてくれた関係者に感謝して

いる。

願わくば農協学校の研修力リキ  
ュラム再編によって、この種の研  
修が充実・存続すること、そして  
各農協の理事者、幹部職員の深い

理解のもとに多  
くの受講者が参  
加できることを  
祈つてやまない  
ものである。

図-1 研修の項目別関心度（複数=3つの項目の計）



表-1 農協の企画・開発部門設置状況(付 農業振興部門)

(支庁別・平成3年対比昭和61年)

年 部 門 区 分 支 庁 別	平成3年版('91年)						昭和61年版('86年)					
	企 画			開 発	農 業 (經 營) 振 興	單 協 數	企 画			開 発	農 業 (經 營) 振 興	單 協 數
	全 体	管 理 企 画	營 農 企 画				全 体	管 理 企 画	營 農 企 画			
石狩	(21) 4	(21) 4	0	(10.5) 2	(31.6) 6	19	(26) 6	(26) 6	0	0	(17.4) 4	23
渡島	(21.4) 3	(21.4) 3	0	(14.3) 2	(7.1) 1	14	(28.6) 4	(21.4) 3	(7.1) 1	(7.1) 1	0	14
桧山	(25.0) 3	(25) 3	0	(8.3) 1	(16.6) 2	12	(23.1) 3	(23.1) 3	0	0	(15.4) 2	13
後志	(19.0) 4	(14.3) 3	(4.8) 1	(9.5) 0	(9.5) 2	21	(14.3) 3	(14.3) 3	0	0	(14.3) 3	21
胆振	(27.3) 3	(27.3) 3	0	(9.1) 1	(9.1) 1	11	(13.3) 2	(13.3) 2	0	0	(6.7) 1	15
日高	(18.2) 2	(18.2) 2	0	0	(27.3) 3	11	(25.0) 3	(25.0) 3	0	0	(8.3) 1	12
空知	(22.2) 8	(13.9) 5 <sup>(1)</sup>	(5.6) 2	(5.6) 2	(11.1) 4	36	(34.2) 13	(26.3) 10	(10.5) 4	(2.6) 1	(15.8) 6	38
留萌	(8.3) 1	0	(8.3) 1	(8.3) 0	(8.3) 1	12	(8.3) 1	(8.3) 1	(8.3) 1	0	(16.7) 2	12
宗谷	(11.1) 1	(11.1) 1	(11.1) 1	0	(11.1) 1	9	0	0	0	0	0	9
上川	(24.3) 9	(16.2) 6	(16.2) 6	(16.2) 6	(24.3) 9	37	(21.9) 9	(21.9) 9	(2.4) 1	(9.8) 4	(19.5) 8	41
十勝	(65.4) 17	(38.5) 10	(30.8) 8	(15.4) 4	(42.3) 11	26	(46.4) 13	(35.7) 10	(14.3) 4	(7.1) 2	(17.9) 5	28
網走	(34.2) 12	(29.7) 11	(5.4) 2	0	(43.2) 16	37	(32.4) 12	(29.7) 11	(8.1) 3	(2.7) 1	(37.8) 14	37
釧路	(7.7) 1	(7.7) 1	0	(7.7) 1	(46.2) 6	13	(15.4) 2	(15.4) 2	0	(7.7) 1	(15.4) 2	13
根室	(22.2) 2	(11.1) 1	(11.1) 1	(11.1) 1	(55.6) 5	9	(22.2) 2	(22.2) 2	0	0	(33.3) 3	9
計	(26.2) 70	(19.9) 53 <sup>(1)</sup>	(8.2) 22	(7.4) 20	(25.5) 68	267	(25.6) 73	(22.8) 65	(4.9) 14	(3.5) 10	(17.9) 51	285

資料：北海道農協年鑑（北海道協同組合連信社）91・86年版より

# 「美味さ」と オイシ

## 在来品種、「地方品種」

野菜と文化のフォーラム主宰

江澤 正平

「美味さ」ということは、誰でも口にするが、ではその内容になると表現がむずかしく第三者に伝えるにくいものである。

「美味さ」は人によって違ったあるとの向もあるが、同じ地域、環境で育つた人との差はあるまい。又「美味」は記憶されておりいわゆる食文化の大切な部分であって、論理的ではないが楽しいものである。

食べ物は安全性、栄養性、し好性で成立つがそのもの 자체の構成要素は分析出来ても「美味さ」は感覚でそれを数字化することは出来ず官能は官能として受取ることになる。

人間始め動物は植物と違い自身の体内で必要な栄養分を自分で作り出せず、他の生物から栄養分を摂ることになっている。

食べ物は永年不足勝ちであったが最近豊富になり飽食時代とまでいわれるようになつた。

「美味さ」にもいろいろあるが、米、野菜等の第一条件は飽きずに食べ続けられるということである。



江澤 正平 えざわ しょうへい

大正元年、東京神田の青果問屋に生まれる。昭和10年、中央卸売市場開場により東印中央青果卸売株入社。同50年東京青果株退社、同年西武青果(株)入社。同56年退社。その後、野菜を識る会、全国青果小売組合青年部顧問、野菜と文化のフォーラム主宰。

老令化の下での野菜の生産はかつての売手市場のような様相であろうが、飽食時代の今日、輸入、冷凍も進んでいるので、「美味さ」とか安全性の特徴が必要であろう。厚生省は健康のための所要量として一人一日芋類を含めて四〇〇グラムを勧めているが、まだ三〇〇グラム強にしかなってない。

健康志向の高まっている今日、需要はのびる可能性が大きいにある。しかし生産側、流通側は食べ物としての関心は稀薄である。消費側は知識も技術もよく知らないし教

育のびる可能性がある。

厚生省は健康のための所要量として一人一日芋類を含めて四〇〇グラムを勧めているが、まだ三〇〇グラム強にしかなってない。

厚生省は健康のための所要量として一人一日芋類を含めて四〇〇グラムを勧めているが、まだ三〇〇グラム強にしかなってない。

野菜が不味くなつたのは「F-1」が多くなつたためと云つてよい。「F-1」は生産性、保存性、揃い、に重点が置かれ食べ物という視点が少なかつた。最近になつてやつと南瓜、トマト、葱など味の良いものも出て來た。しかし、何んと言つても在来品種、地方品種には「美味しい」ものが多い。

玉葱の札幌黄を支えているのはその「美味さ」を識る業務筋を抱

えられてもいらない。であるから全體として物品扱になり、品質の一端である鮮度を重視する外観判断ですべてが扱われている。

好例がブルームレス（白い粉のない）胡瓜である。流通業者は不味くとも不味いとは言わない。消費者が鮮度が良いと思い不味いを知らずに買うのを見ているだけである。その結果は、味を知つて人は買控え、味を知らない人は胡瓜の味はこんなものと思うようになる。当然に消費が減つた。そのうえ從来そ物は漬物屋が買つていたが、ブルームレスは使わずに（漬物適性を欠くため）、わざわざ輸入して居る始末である。

野菜が不味くなつたのは「F-1」が多くなつたためと云つてよい。「F-1」は生産性、保存性、揃い、に重点が置かれ食べ物という視点が少なかつた。最近になつてやつと南瓜、トマト、葱など味の良いものも出て來た。しかし、何んと言つても在来品種、地方品種には「美味しい」ものが多い。

玉葱の札幌黄を支えているのはその「美味さ」を識る業務筋を抱えている商系の人達ではないだろうか。現在の卸売市場は玉葱を正しく評価しておらない。

「美しい」ものはまず自家用、そしてその良さを消費側に判らせることが必要で、「美しい」ものを欲する者は沢山いる。しかし、相互が知らないだけである。流通側はそれをつなげることが仕事である。在来品種の種子は国のシードパンクには保存されている。しかし、在来品種が存在するということは多くの人に食べられているということになる。在来品種は先人達の努力の積み重ねで創られた文化財で、子孫に引継がれるべきものである。在来品種は札幌黄の他に沢山残つている。

今、地方の時代といわれているが、地方独特的文化があつての地方の時代である。便利さや快楽とは別に、文化とはそれにつくるまつていてると安らぐもの、楽しいものと司馬遼太郎は言つてゐる。文化には方言、食べ物（在来品種）そして風土、風景が必要である。次時代に渡してゆかなければ……。

# お湯と一緒に赤ん坊を流すな

## 農業基本法の大切な精神

札幌大学 教授 岩崎徹

### 一、

農業基本法（以下基本法）が制定されてから三十年経った。基本法が制定されてからの農政を基本

月基本法三十年を区切りとして「新しい食料・農業・農村政策検討」のための本部を設置し、この四月には「新しい農政」の基本方針が示されることになっている。

その「見直し」の概要は①多様

な扱い手の育成、②土地利用型農

法農政は続いているということにな

る。とはいっても基本法やその理

念が意識され議論されたのはせいぜい最初の十～二十年であり、基本法は今や死語になつていてよい。

ところで農林水産省は、昨年五

いる。農基法の「見直し」の上に「新しい農政」が生まれようとしているのである。では基本法とは一体何であったのか、さらに「新しい農政」は何を図さしているのであろうか。

### 二、

基本法の前文を思い起しそう。「農業及び農業従事者の使命」は「民主的で文化的な国家の建設に

とつべきわめて重要な意義を」持つものであるにもかかわらず、近

時「他産業との間に……格差が拡大しつつある。……このような事態に対処して、農業の自然的経済的社會的制約による不利を補正し、農業従事者の自由な意志と創意工夫を尊重しつつ、農業の近代化と合理化を図って、農業従事者が他の国民各層と均衡する健康で文化的な生活を営むことができるようにする」とは……われら国民の義務に属するものである。」

今読んでみても、格調高い宣言である。否、今読んでみてこそ格調高いと言るべきか。「農業の不

利を補正し、他産業との格差を克服し、農業従事者が健康で文化的な生活を営むことに誰しも異論をさし挟む者はいまい。問題は所得均衡を実現する方法とその実際にあつた。基本法は農業構造を改善し、「自立經營農家」を育成し農業經營を企業として確立することによって所得均衡を実現しようとした。ここに基本法論議の中で、「自立經營農家」の概念、規模、「自立經營」以外の農家を含む農業構造のあり方、等々をめぐつて激しく論議がたたかわされたといふのである。

基本法の総括は難しい。何故なら基本法は、さまざまなる勢力の要求を契機とし、それらの力の対抗と妥協の産物として成立したものであるからである。また、基本法は宣言立法としての性格が強いため抽象的であり、ひとによりその性格づけや評価が様々であるからである。

しかもその後の経過は、急激な「高度成長」や地価高騰、兼業化の急進といった基本法制定者の「読み違え」もあり、基本法制定

た。基本法の目玉である「自立經營」や中核農家は（北海道を除き）育成されず、したがつて基本法は失敗したというのが最大公約にあつた。基本法は農業構造を改善し、「自立經營農家」を育成し農業經營を企業として確立することによって所得均衡を実現しようとした。ここに基本法論議の中で、「自立經營農家」の概念、規

模、「自立經營」以外の農家を含む農業構造のあり方、等々をめぐつて激しく論議がたたかわされたといふのである。

しかしながら、基本法は農工間の所得均衡をはかること、農業所得で他産業との均衡をはかることが目標とされたこと、そのため基本的には国内農業生産の自給が暗黙の前提とされたという積極面を持つていたし、そのための農業保護政策が政策の基礎となつたと思われる。

本法の功罪は相半ばするといったところか。

本法の功罪は相半ばするといったところか。

さて、このような事態を前にして、今後の農政はどうに行くのであるか。「新しい農政」は、大きな「見通し」や「目標」を持って欲しいものである。何事においても「見通し」や「目標」のないことはほどつらいことはない。ひとは壁が大きく困難はあっても、目標が明確であればそれを克服することができます。農業者にとって最大の問題は、今後の農業の見通しが全くたたず、農業經營の目標が打ち立てられないことであろう。

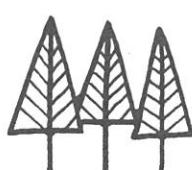
基本法は今や死語となりつつあると冒頭に述べた。今や基本法の全否定ともいふべき議論がまかり

## 二、

どこまで農産物の開放が進むのか、国内農業がどのような水準に維持されるのが、その論理は何か。そのことを「新農政」は是非明らかにして欲しいものである。

激動の「農基法三十年」である〇年代、とりわけ後半になると、農政は「農政としての独自性」の法をなさず、国内農業は全面撤収数的評価であるうか。私も基本法農政の枠組みの中に「過剰と不足」の奇形的農業構造を形作る危険性があつたし、あまりにも生産力志向のため政策が画一主義的であるとの批判を行つてはきた。基本法の功罪は相半ばするといったところか。

さて、このような事態を前にして、今後の農政はどうに行くのであるか。「新しい農政」は、大きな「見通し」や「目標」を持って欲しいものである。何事においても「見通し」や「目標」のないことはほどつらいことはない。ひとは壁が大きく困難はあっても、目標が明確であればそれを克服することができます。農業者にとって最大の問題は、今後の農業の見通しが全くたたず、農業經營の目標が打ち立てられないことであろう。



激動の「農基法三十年」である〇年代、とりわけ後半になると、農政は「農政としての独自性」の法をなさず、国内農業は全面撤収数的評価であるうか。私も基本法農政の枠組みの中に「過剰と不足」の奇形的農業構造を形作る危険性があつたし、あまりにも生産力志向のため政策が画一主義的であるとの批判を行つてはきた。基本法の功罪は相半ばするといったところか。

さて、このような事態を前にして、今後の農政はどうに行くのであるか。「新しい農政」は、大きな「見通し」や「目標」を持って欲しいものである。何事においても「見通し」や「目標」のないことはほどつらいことはない。ひとは壁が大きく困難はあっても、目標が明確であればそれを克服することができます。農業者にとって最大の問題は、今後の農業の見通しが全くたたず、農業經營の目標が打ち立てられないことであろう。

この三十年間の垢を落すのはよい。しかしあ湯と一緒に赤ん坊を流すことのないよう願いたいものである。

# 情報システムはいま

(社)北海道地域農業研究所

専任研究員 中村 正士

オフトーク通信については、北海道ではまだ一ヵ所しか導入事例がなく余り知られていない。このメディアは一言でいえば、電話回線を使い電話が使われていない空時間を利用して情報を送るもの、ということになる。

一般家庭の電話回線は、常時使われている訳ではなく、ほんどの時間は空いている。この回線の

情報システムといつと、コンピュータ通信やファックスといったメディアを利用したシステムを思い浮かべる方が多いと思うが、今回は、オフトーク通信と有線テレビ(CATV)を使った地域内情報システムの事例を紹介したい。一度も使ったことがないメディアの機能や便利さの解説は、かなりすしも理解やすいものではないが、地域での新しい情報システム作りに参考になれば幸いである。

## オフトーク通信とは

空き時間をフルに利用して、音声などの情報をセンターから流すサービスをNTTではオフトーク通信サービスと呼んでいる。

図-1 オフトーク通信サービスのしくみ

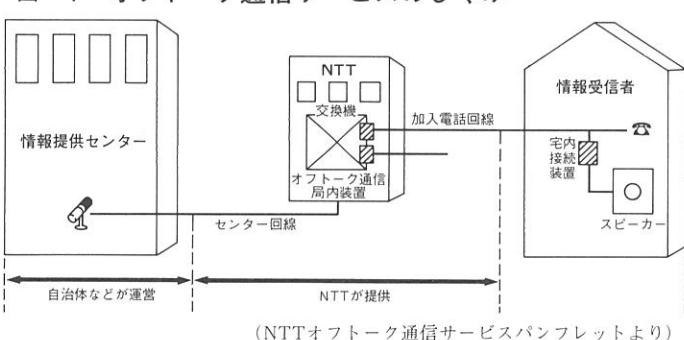


図-1はオフトーク通信の概念図である。情報を受け取る側には、スピーカーが、センター側には、簡単な放送設備などが必要である。センターの放送設備からマイクや受信者のスピーカーから音声が流れてくる仕組みだ。ここまでは、農村で普及していた有線放送に近いものであるが、音質は有線放送

とは全く異なり、オフトークの場合は音楽放送としても楽しめるほど音はきれいだ。

オフトーク通信では、音声のほかにファクシミリによって情報を送ることもできる。更に、テレビ受像機とアダプターをつければ静止画像も送ることができ、テレビの画面を見ながらキーパッドで生

活用品などの予約注文もできる。

四つまでのチャンネルが設定できるので、チャンネルごとに別の情報を流すことも可能である。この機能を使い、あるチャンネルはエンドレストーープで重要なお知らせを再放送するようにしておけば、聞き逃した放送も後から自由に聞くことができる。また、ある特定の地区に情報を流すためのグループ機能もある。もちろん、空き時間を利用して情報を送るのであるから、電話を使う場合は音声などは中断するし、相手から電話があつた場合も通話が優先される。オフトーク通信の運用上の特徴は、次のようなものである。

- ①利用料金は利用時間に関係なく月額五百円である。
- ②新たに回線を施設する必要がない。
- ③回線の保守はNTTがすべておこなうので運用者に負担がほとんどかからない。
- ④センター側の運営コストが低い。

オフトーク通信の導入事例は、平成三年十月現在で、全国で六十

九ヵ所となっている。ここでは、比較的小規模ではあるが情報システムだけでなく地域活性化にも力を入れている。熊本県久木野村の事例と長野県中央会が実施しているオフトーク通信で画像を送る実験事業を紹介したい。

## オフトーク通信

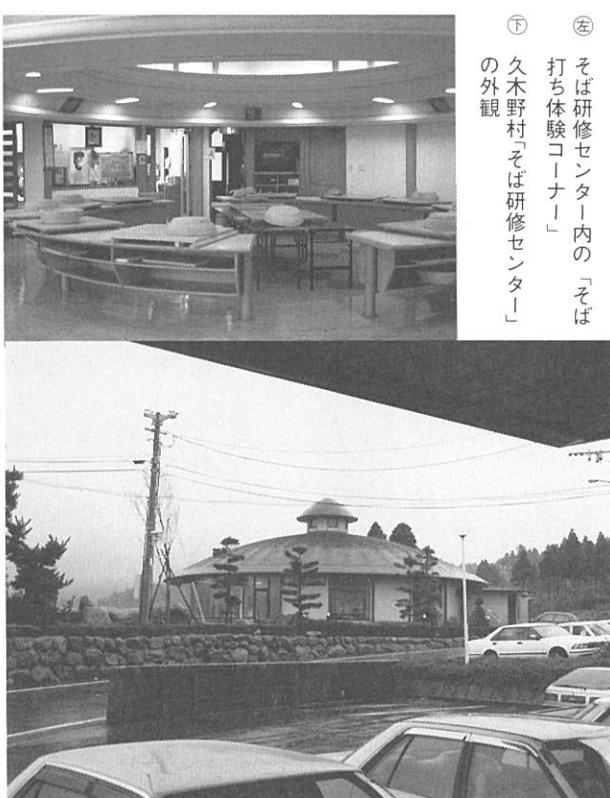
熊本県久木野村

久木野村は、熊本市から車で一時間ほど、阿蘇外輪山と阿蘇山に挟まれた南郷平野に位置する景観に非常に恵まれた村である。ここも例にもれず、過疎化が激しく、昭和四十年に四、二〇〇人だったが、平成三年には一、七四五人と激減している。現在、戸数六五〇戸で、一戸当たりの平均耕地面積は一・三haで、稻作、畜産、林業が中心の純農村である。久木野米と呼ばれる美味しい米が取れた地域だが、水田の減少に伴い現在は、トマト、メロン、花き、そば、じねんじょなどを栽培している。

過疎化対策に知恵をしほる  
村では過疎対策として種々の試

みをおこなっている。特産のそばを生かした「そば研修センター」、阿蘇の雄大な景観を利用した世界最大と言われる「野外コンサート場」、レストランと地元特産品販売所を併設した「久木野村温泉センター」など村起こしに知恵をしほっている。「そば研修センター」ば打ちが体験でき、レストランと特産品売店を併設した凝ったつく

⑤ そば研修センター内の「そば打ち体験コーナー」  
⑥ 久木野村「そば研修センター」の外観



りの施設である(写真一・一)。温泉には平成二年度で約二十万人の入浴客があり、これらの新しい施設によって多くの観光客が訪れる、村の活性化に大きく貢献している。また、野外コンサート場でのロックコンサートには七万人もの観客が集まり、今まで知られていなかつた「久木野村」の名を広め、特産品のブランド化に大きく寄与した。こうした地域活性化の

一環としてオフトーク通信「久木野村さわやか通信」が生まれた。

#### オフトーク通信の導入経過

久木野村では昭和三十八年以来、農協の有線放送が情報伝達手段として使用されていたが、設備老朽化のため平成二年で廃止を余儀なくされた。これに代わって近隣の村で設置されている防災同報無線も検討したが、野外で作業する者が多いことから情報が伝わりにくく、これを解消するために野外に設置されたトランペッスピーカーの音が山にこだまして聞き取れないなどの問題点が指摘された。そこで、こうした問題が少なく、①設備保守管理の心配がないこと②放送設備が簡単であること③利用者の料金が安いことから、音声とフクシミリによるオフトーク通信のシステムを採用した。

久木野村におけるオフトーク通信の運用主体は、村役場であるが農協にも放送施設を備えており、村と農協の協力のもとに情報提供をおこなっている。加入戸数は六十六戸（村全戸数の九十四%）で、この事業は財源として過疎地域振

興特別対策事業債を活用し、総事業費は三千万円である。センターバー装置、録音編集機器、ファクシミリなどが設置されており、加入者側の設備は、宅内接続装置とスピーカーなどを村が貸与している。

#### 「久木野村さわやか通信」の

##### 運用状況

さわやか通信は平成三年二月一日から、スタッフ一人（兼任）で運用を開始した。放送内容は、朝夕各七十分間、昼三十分钟の定期放送で、「役場からのお知らせ」のほか、農協だより、学校からの連絡事項、音楽放送、ラジオの再放送などを流している。久木野村は九地区に分けられており、各地区の区長宅にはオフトーク通信用のファクシミリが設置され、文書でも情報が伝わるようになっている。また、地区単位に情報を流すことにより、各集落内の情報伝達に威力を發揮しており、区長の負担も以前より軽くなつた。

加入者の利用料金は、月額五〇円（有線放送は三〇〇円であつた）でNTTの電話料金から引き

落とされる。一方、役場側は、通信接続料、回線利用料など月額十五万円を負担し、農協は月額二万円を村役場に支払っている。

スタッフが兼任ということもあり、取材活動まで手が回らざる組作りには苦労しているとのこと。こうした放送の番組制作はやはり

専任のスタッフが必要のようだ。

元旦には、「久木野村さわやか通信」で町長と農協組合が年頭の挨拶をするとのこと。まだスター・トしたばかりのさわやか通信は、これから地域の中でのいろいろな活用が広がっていくことだろう。

## 画像オフトーク通信

### 長野県農協中央会・農協地域開発機構

前述の久木野村の例のような音声とファクシミリによるオフトーク通信は、実際に各地で稼働しているが、オフトーク通信を利用しても情報が伝わるようになつてゐる。また、地区単位に情報を流すことにより、各集落内の情報伝達

が老朽し、音声が聞き取り難いことなどを理由に農家によつてはボリュームを落としてしまい、情報が十分伝わらなくなつてゐる例が多いのが現状である。

こうした中、長野県農協中央会などが中心となつて、有線放送に代わる新しい情報伝達手段を検討してきた。検討の結果、種々の特徴を持つ画像オフトーク通信に注目し、これを利用したモデル実験を長野県あづみ農協管内豊科町で実施する運びとなつた。

#### モデル実験は

##### こうしてはじまつた

長野県では、従来、有線放送設備が整備され有効な情報伝達手段であった。しかし、近年、設備

広がる町である。

このモデル実験は、県中央会の

ほか長野県農協地域開発機構、N

TT信越支社、信濃毎日新聞社が

実施主体となって、平成三年八月

から平成四年一月までの半年間の

実験を予定している。また、南安

曇郡豊科町踏入地区内の三十三戸

の農家とあづみ農協本所、南穂高

図-2  
プリンターからの出力例（画像オフトーク通信）。  
テレビ画面のイメージがそのままプリントされる。

3チャンネル #0 308091010  
全国初のテレビジョン実験中

長野県農協中央会、(社)長野県農協地域開発機構、信濃毎日新聞社、NTT信越支社は共同で8月12日(月)からあづみ農協管内で全国で初めての画像オフトーク通信サービス=テレビジョンの実験を実施しています。

**画像オフトーク通信の仕組み**  
画像オフトーク通信は、よく郵便局や街で見かけるキャブテンを思い浮かべて頂ければ理解が早い。ただ、画像オフトーク通信のシステムでは画像、音声、ファクシミリの三種のメディアが利用可能ということである。

もともとキャブテンは、家庭の電話回線にアダプターをつけて静止画像を送り、利用者がキーを押して予約や注文をする双向システムとして開発されたものであるから、技術的に見れば画像オフトーク通信とあまり変わりはない。差があるのは画像オフトーク通信は、特定の地域内で特定の利用者を対象として運用されるが、キャブテンは料金さえ払えば誰でも利用できることである。また、利用者が払う料金は、オフトーク通信は月額五百円だが、キャブテンは三分三十円ということである。

画像オフトーク通信のサービスを受けるには、受信用テレビ（日常使っているテレビでよい）と宅内スピーカ、プリンタ、それにアダプターが必要である。利用者は、支所、豊科町役場、日赤病院など七事業所がモデル実験のモニターとなっている。オフトーク通信センターは、豊科町にある協同電算中信センター内に設置されている。

アダプターの四つのチャンネルから見ようとするチャンネルを選択すると、画面に漢字十五字（横）×八行で文字が表示される。画面は、十秒程度で次の情報を表示し、何件か表示すると最初の画面にもどる。メモを取りたい時にはプリンターのキーを押せば、画面の文字がプリントされる。画面に表示されるスピード、画質、色などはNTTのキャブテンと同じと考へればよい。

宅内スピーカからは、有線放送と同様にセンターカラーティの都度情報が流される。音声による情報と画像は、同時には受信できないので、スピーカーから情報が流れている間は、画面は直前に表示したままの状態で静止している。

また、アダプターに付いているキーパッドから、数字などを入力することにより品物の発注なども可能である。

### モデル実験の概要

まず、センターでは、農協、病院、警察署、公民館などからの情報内容をチェックし、パソコンのワープロソフトによって、決めら

れた書式で送信する文書を作成する。次に、画像へ変換し、モニターパン画面によつて内容、表示色等をチェックする。また、画像情報は、三秒～二十秒の範囲で表示時間を設定できるので、情報内容によって時間を設定すると共に流すチャンネルを決める。

音声で緊急情報を流す場合は、センター側の制御で音量調整は解除され、全チャンネルへ音声が流れれる。

今回の実験では、使っていない機能であるが、情報の送信先をグループに分けて放映する機能や特定の情報を特定の個人・グループに送るページング放映という機能もある。

### 提供されている情報内容

モデル実験なので、提供される情報は限られているが、実際の運用時に近いものである。提供される内容は、表一のようにチャンネルごとに①各機関や学校からのお知らせ②農業関連の情報と農協からの連絡③生活やレジャーに関する情報④地域の話題など四つに分類されている。

**モデル実験終了後は**  
モードル実験は、平成四年一月で  
一応終了するが、その後、実験で  
得られたモニターの意見やシステ  
ム上の改善点などを関係機関との  
間で協議する。

研究委員会で検討し報告書にまと  
められる予定になっている。  
この実験の結果、どのような課  
題があるか、どう解決されるか注目した  
い。

表-1 画像オフトーク通信で提供されている情報内容

<b>[1ch Nチャンネル(お知らせ)]</b>
①行事内容 ②役場、学校、公民館等からのお知らせ ③道路工事案内 ④報道ニュース
<b>[2ch Aチャンネル(農業・農協情報)]</b>
①栽培技術指導 ②農政情報 ③生産資材情報 ④生活・組織情報 ⑤購買情報 ⑥農業機械情報 ⑦自動車情報 ⑧スイス村情報 ⑨金融情報
<b>[3ch Lチャンネル(生活情報)]</b>
①料理情報 ②病院情報 ③健康管理 ④生活設計 ⑤地域文化情報 ⑥スポーツ ⑦レジャー ⑧趣味 ⑨TELEVISION言葉の辞典
<b>[4ch Uチャンネル(利用者情報)]</b>
①地域の話題 ②サークル案内

**大分県大山町(OYT)**

大山町は、福岡市から南東約七十キロに位置し、三方を山に囲まれた山合いの町である。町の総面積四十五・六四平方キロの八割が山林で、杉の産地としても有名なところである。また、周囲が山で質の良い湧き水も豊富なところである。

人口は四、五〇〇人で農家が七〇〇戸、非農家三〇〇戸となって  
いる。農家の平均耕地面積は五〇  
アール程度で非常に狭く、作物の  
収益性や利用効率を考える必要が  
あることから、昭和三十六年から  
少量多品目生産と農産物の加工に  
よる付加価値をつけることに重点  
をおいた農業改革運動に取り組ん  
だ(一次NPO運動)。この運動  
は、「国の施策にただ合わせるだ  
けでなく、自分たちの地域に合  
った方策を考えた」結果だったが、  
成果が実をもたらす全国から注目を  
集めており、役場には全国から沢  
山の視察者が来る。NPO運動は、  
二次、三次と展開され、大山町独自  
のアイディアに富んだ町づくり  
に取り組んでいる。

**アイディアに富んだ地域振興**  
化の取り組みの一端を紹介する。  
一次NPO運動のなかで、田に  
は梅を、畑には栗を植えることを  
奨励し、収益の向上を図った。N  
PO運動(NEW Plum and C  
hestnuts)は、梅(P)と栗(C)  
を植える」とから始まった。また、  
若者がついてくる農業を目標し、週  
休三日で収益の上がる農業を提唱  
した(農家には、午前中は働き、  
午後は余暇を楽しむよう勧めた)。

都会との情報格差の無い町づくり

題や問題点が出てくるか、そして、  
それがどう解決されるか注目した  
い。

だけでなく、自分たちの地域に合  
った方策を考えた」結果だったが、  
成果が実をもたらす全国から注目を  
集めており、役場には全国から沢  
山の視察者が来る。NPO運動は、  
二次、三次と展開され、大山町独自  
のアイディアに富んだ町づくり  
に取り組んでいる。

新しい体験や情報を求めるた  
め、町民が海外に出やすいように  
低利子の貸付制度を設けたりもし  
ている(全町でバスポートの所有  
者は、三・五人に一人の割合との  
ことである)。海外にも情報のア  
ンテナを張る試みとして、イスラ  
エルのメギド町と姉妹都市となっ  
ていて毎年三人を長期派遣してい  
ることである。

### 反一千万を目指す農業

農家の収益を上げるための努力  
も興味深い。農家が手がけている  
作物は、梅、栗のほかエノキダケ、  
ナメコ、クレソン、すもも、みよ  
うが、梨、シトロン、にら、菜花、  
葉わさび、中国野菜、実山椒、ユ  
ズ、ギンナンなど実に多彩である。  
高齢者にも、生きがいを持つても

## 農村型CATV

らい、同時に現金収入を得てもう  
うため、もみじの葉、イチヨウの  
葉、栗のいがと言った山へ行けば  
簡単に採れるものや梅を剪定した  
枝なども農協で扱っている。子供  
達は、山で採った生きのよいカブ  
トムシなども持ってくる。これら  
の代金精算は、持参者の名前で精  
算することでみんなの励みになる  
ようにしている。最近では、ミニ  
バラ、ハーブなど食生活のファッ  
ション化に対応したものに取り組  
んでいる。

市生活者の情報は欠かせない。情報報を農家ができるだけ早くキャッチできるよう、農協の婦人部では研修で京都の高級料理店へ行ったり、町の職員が東京などへ出張する場合は、必ずデパート、スーパーマーケットを回りをするなど、町ぐるみで新しい情報の収集をしている。

従来、有線放送施備が有つたが過疎化を防ぐためには都会との情報報格差をなくし、「みんなが住みたくなるような生活環境をつくる」との考え方のもとに、有線テレビ

ビ放送の導入が計画された。昭和五十六年に新農業構造改善事業計画の中にCATV事業を盛り込み、種々の検討を重ね苦労の末、昭和六十二年に試験放送を開始した。周囲が山に囲まれ難視聴地域であつたこと、過去のNPO運動で得た「情報」に対する認識がCATV導入の原動力となつたようである。「(「ヨーハートウエア戦略」第一法規刊)に詳しい)

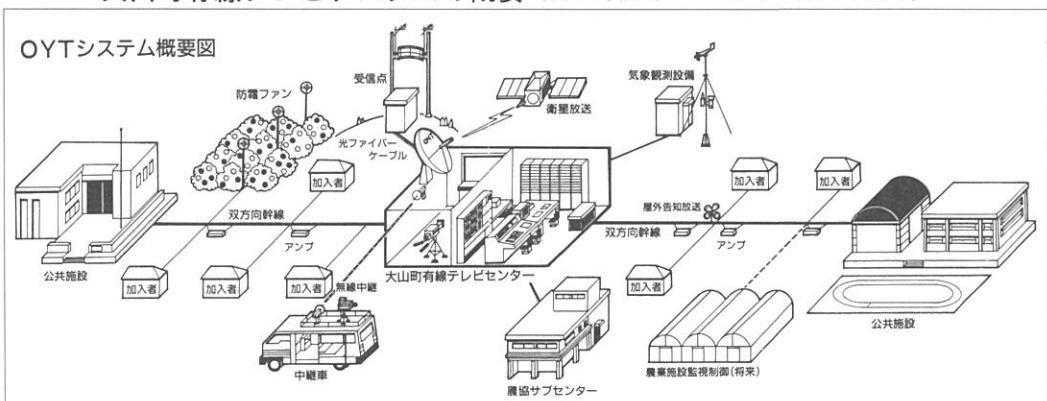
このCATV事業の事業費は、農水省の補助一億七千六百一十万円、過疎債の起債一億四千八百五十八万円、そして一般財源から一千七百六十二万円、総事業費五億五千二百四十万円となつてゐる。システム全体の概要は図二のようないふもので、主要な設備は、再放送設備、無線中継設備などがある。自主放送設備は、役場に設置されてゐるスタジオ、調整室、中継車のほか、農協にも簡易スタジオが設けられている。学校などの公共施設には、双方向設備によつて中継放送をセンターに伝送できる設備も整つてゐる。スタジオや調整室

は、大きくはないが本格的な放送局である（写真三・四）。また、気象観測設備も設置されており、町内四ヵ所からデータが自動的に送られてくる。このデータを利用して、自動的に梅園の防霜用ファンを作動させる試みも行っている。

OYTの放送内容

て告知放送端末機と呼ばれる受信機を使って、連絡放送や緊急放送を音声で知らせたりBGM放送も送っている。更に、区長や農事主事など不在でも情報が必ず届かなければならぬ所にはこの端末にプリンターが接続されており、文書を送ることもできる。

図-2 大山町有線テレビシステムの概要（大山町役場パンフレット OYT より）



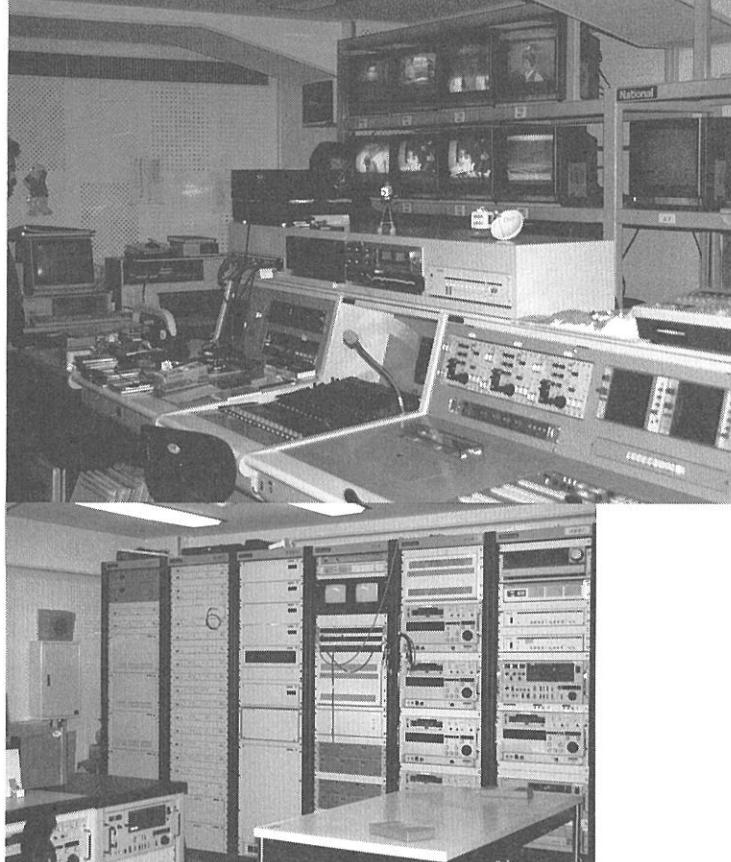
## 農村型CATV

一般的テレビ放送の場合は、電波を受けるのに対して有線テレビ(CATV=Cable Television)の場合はケーブルでテレビ放送を送信するものである。もともとCATVは、テレビの難視聴地域で共同アンテナを建ててテレビ放送を受信し、それを各家庭に分配したのが始まり。

CATVに使われる同軸ケーブルは、伝送能力が高く数十チャンネル以上の信号をのせられるから、テレビの再送信以外に自主放送、防災システム、双方向の情報やりとりなどもできる。

郵政省では加入世帯数1万戸以上で5チャンネル以上の自主放送をし、双方向の機能を持つものを都市型CATVと呼んでいる。

これに対して、営農情報、生活情報、ファクシミリ伝送、防災施設や水利施設の監視制御等、農業・農村の振興を目的としたCATVを農村型CATVと呼んでいる。また、農村型CATVを農村多元情報システム(Multi Purpose Information System)、これを略して農村MPISと呼ぶこともある。現在、19ヶ所以上の町村にこうしたシステムがある。



放送用機器がところ狭しと並んだ大山町CATV放送局の調整室

る自主放送が二チャンネルとなつてある。

自主放送の一つは、気象情報専用で観測設備からのデータを常時放送している。放送は町主体で運用されているが、農協、学校などなども自主放送の制作に協力している。自主放送のスタッフは、町職員五人(内女性二人)が専任として配属されている。

放送内容は、町内のニュース、学校だより、町での催し物、議会中継などである。年末年始は、映画などが人気が高く、また、町議会の中継は、ほぼ100%の視聴率のこと。

通信衛星を使って東

京の消費者と大山町との二元生中継による討論会を放送したことある。

有線テレビの経費については、全戸一、一六五戸から生活保護世帯を除き月額千三百四十円を徴収しているが、この料金だけでは維持できないとのことである。

将来的には、ガス、電気の検針等にもCATVのケーブルを利用してデータを集める計画もあるようだ。このシステムは設備投資も大きいがそれだけに利用範囲もかなり広いようだ。

### 活性化の手段としての

#### 情報システム

大山町では、地域活性化の一手段として情報システムが重要な意味をもっている。言い換えれば、情報システムを、単に情報を伝えただけではなく、新しいニーズを発見したり、新たに情報を創り出すための手段としているということだ。同時に、情報システムが考えられる前に、地域活性化について種々の試みがなされていることも注すべきであろう。

# 研究日誌

地域農研では、研究所独自の研究、農協および市町村との共同研究、道および関係機関からの受託研究を行っていますが、ここでは平成二年十一月～平成四年一月の調査研究活動の概要を報告します。

## 独自研究

### 農協合併と組織再編 (第三回農協問題定例研究会)

十一月二十六日、滋賀県立短大助教授、増田佳昭氏を招き第三回定例研究会が開催された。

最初に、増田氏から標記のテーマで話題の提供がなされた。

その内容は、現在全国的に農協の合併がすすめられているが、その背景として、農業の構造変化が挙げられる。第一の要因は、離農の進展と大型専業農家の出現によつて、農協組合員の同質性が崩れてきたことである。第二の変化は、信用事業の自由化によつて、農協の収益性が低下してきている。第三に購買事業面での環境変化である。

生産資材等で大規模農家層に商系が食い込み、競争が激化しているため購売事業方式の見直しが必要となつてゐる。第四に農協職員の転職率が上昇し、職員の採用が困難となつてきている。

以上の背景の下で全国各地に、広域合併農協が生まれ、合併農協にいくつかの問題が出されている。

第一に、本所への営農指導員の集中と専門化によつて効率化は進んだが、農家との距離が拡がつた。第二に行政との関係で、合併によつて町から農協への補助金が出しづらくなるという農業政策と農協

事業との矛盾。第三に、職員の賃金を高い所に合わせることや、手数料を低い方に揃えるなどから合併後の収益性が一般的に下がることである。

次に系統組織の再編の問題である。農業の構造変化の中で組織の再編が必要となつてきているが、再編に際し、重要なことは、組織の段階制からのアプローチではなく、単協や県連のサイドから、事

業別に徹底的に洗い直すことである。その結果として系統三段階の在り方を検討する必要がある。

以上の増田氏の課題提供をもとに討論が行なわれ、農協の事業と地域活動の問題、農協の地域に果す役割、協同組合間共同の問題などが話し合われた。

## 受託研究

本誌秋号でお知らせしました「農産物の低コスト・冷温貯蔵に関するアンケート調査」(開発局、開発協会受託研究)については、

関係百十八農協を対象として実施した結果、回収率七一%で調査を終えました。関係者のご協力に感謝申し上げます。現

在、集計作業と一部農協については現地調査を継続実施中です。

「北海道における農協の規模・事業展開方式に関する調査研究」(北海道)については、道に対し府県調査結果を中心とした課題の一部について中間報告を行いました。

管内農協を対象とした農振計画基礎調査の担当者研究会を札幌で実施したほか、栗山町農業情報システムに關わる府県先進地事例調査を行いました。

# 掲示板

(パネラーを兼ねる)

一フリストールの導入  
をめぐつてー

酪農の展望  
派遣講師 当研究所・千葉所長

◎公立学校事務職員協会石狩支部研修会

主催 北海道公立学校事務職員協会 石狩支部

とき 平成三年十一月六日

テーマ 北海道農業のあらまし

ー農業の多面的役割・機能ー

派遣講師 当研究所・富田常務

理事

各種研修会等への  
講師派遣

◎大野町園芸研究会野菜栽培冬季講座  
主催 渡島大野農業協同組合  
とき 平成四年一月十三日  
テーマ 道南野菜に期待するこ

派遣講師 当研究所・富田常務

理事

◎第二十二回農協青年大学  
主催 北海道農協中央会  
とき 平成四年一月二十九日  
テーマ 野菜をめぐる環境と産地形成ー

派遣講師 当研究所・富田常務

理事

◎第七回空知冬季農業講座  
主催 北農中央会岩見沢支所他  
とき 平成四年一月二十四日  
テーマ 北海道菜野の位置づけ

派遣講師 当研究所・富田常務

理事

◎第二十五回農業セミナー  
主催 拓殖大学北海道短期大学  
とき 平成四年一月三十日  
テーマ 担い手が語る北海道農業

派遣講師 当研究所・富田常務

理事

◎第三回北海道の食糧と農業を考えるつどい  
主催 北海道の食糧と農業を考

えるつどい事務局  
とき 平成三年十一月二十七日  
基調講演テーマ

◎国民の食糧を考える釧路連合会  
主催 国民の食糧と健康を守る

第四回総会・記念講演  
主催 釧路連絡会

分担報告 北海道農業の課題と今後の取り組み方向ー

対応者 当研究所・富田常務理事  
テーマ 酪農における新技術の導入過程に関する試論

とき 平成四年一月二十五日  
テーマ ガットの現局面と本道

対応者 当研究所・千葉所長

担当者 当研究所・吉野専任研

◎普及推進協議会・研修会

主催 空知中部地区農業改良普

及所

とき 平成四年二月六日

テーマ 北海道農業の課題と今

後の取り組み方向

派遣講師 当研究所・富田常務

理事

◎北桧山町農民塾

主催 北桧山町

とき 平成四年二月七日

テーマ 情報システムはいま

派遣講師 当研究所・中村専任

研究員

◎企業者マインド醸成研修会

主催 石狩支庁

とき 平成四年二月十二日

シンポジウムテーマ

農業における雇用問題を考える

パネラー派遣者

当研究所・富田常務理事

考える

## シンポジウムの開催案内

(社)北海道地域農業研究所では、シンポジウムを下記により開催いたします。第1回シンポジウムでは、生産、流通に携わる方がた及び消費者を交えて討論を行い、食料の生産から消費に至る過程で起きている、さまざまな矛盾や課題を明らかにするとともに、その解決の道を探ります。

### テーマ 「食料の消費と生産を考える」

基調講演 「国民生活の中で農業とは」暉峻淑子氏（埼玉大学教授）

〈パネリスト〉

「生協における食の安全と農産物に係わる取り組み」

佐々木珠美氏（市民生協コープさっぽろ検査室長）

「より全な食料生産を通じ、消費者との共生を目指す農村づくり」

四辻 進氏（北竜町農協参事）

「食料流通の課題」

澤田 一義氏（北海道女子短大助教授）

座長 岩船 修氏（北海道協同組合通信社社長）

とき 平成4年2月13日（木） 10時から16時まで

ところ 共済サロン 8階 芙蓉の間（札幌市中央区北4条西1丁目共済ビル）

主催 (社)北海道地域農業研究所

後援 北海道 北海道生協連 市民生協コープさっぽろ 北農中央会 ホクレン

\*参加ご希望の方は、ファクシミリにて下記にご連絡ください。（定員になり

次第締め切ります。）

北海道地域農業研究所 FAX 011(751)1106 電話 011(751)1103



農協の活路をいかに切り開くべきか

# 系統再編と農協改革

## 続・明日の農協

不惑の年を迎えた農協がクリアすべき課題は何か  
2段階再編に、単協・県連はいかに対処すべきか  
輸入攻勢、産地競争に打ち克つ農協戦略は――

北海道大学教授 太田原高昭 著

1月30日発売予定 A5判上製290頁 2,800円

【おもな内容】

何を変え  
何を守るべきか

### 農協改革の基本視点

- ◎農協をめぐるロマンティシズムとリアリズム ◎タテマエとホンネの使い分けは、もうきかない
- ◎食管依存の経営体質から脱皮をめざそう ◎北海道農業の変化と農協の実績

いかに進め  
または進めるべきでないか

### 農協合併と系統再編

- ◎なくしてはならない連合会の機能 ◎県連の総合連合会制の提案
- ◎農協合併 2つの道一産地形成型と合理化型 ◎2段階論への疑問

### マーケティング機能と マネジメント能力をいかに高めるか

- ◎北海道とうや湖農協の実践に学ぶ ◎専門農協と総合農協の利点を生かした新総合農協
- ◎愛媛県温泉青果農協、佐賀県小城郡農協の実践に学ぶ

### 農協理論の前進のために

- ◎「制度としての農協」再論 ◎梶浦福督・安達生恒『農協大改革案』批判
- ◎地域協同組合論はレイドロウ報告をいかに誤読しているか
- ◎産地間競争と棲み分け理論



活力ある明日 の農業・農村を拓くため

## 農地の効率利用を促進する 農地保有合理化促進事業

この事業は、農地を買入・借入れし、集団化や開発造成を行なって、規模を拡大したい方や新規就農者に売り渡し・貸付を行うものです。

(財) 北海道農業開発公社

060 札幌市中央区北5条西6丁目 農地開発センター内  
TEL 011(271)2231